田野町文化財調査報告書第２集

YOSHIGASAKO

芳ケ迫第２遺跡

芳ケ迫第３遺跡

FUDANOMOTO

札ノ元遺跡

県営農地開発事業前平地区に
伴う埋蔵文化財発掘調査概報

昭和６０年３月

田野町教育委員会

正　誤　表

頁	行	誤	正
1	9	発堀調査	発掘調査
4	3	自動車建設	自動車道建設
14	下の方	第1図	第10図
22	14	荒い	粗い
〃	30	荒	粗
24	2	荒い	粗い
〃	14	荒い	粗い
26	12	荒い	粗い

田野町文化財調査報告書第２集

YOSHIGASAKO

芳ケ迫第２遺跡

芳ケ迫第３遺跡

FUDANOMOTO

札ノ元遺跡

県営農地開発事業前平地区に
伴う埋蔵文化財発掘調査概報

昭和６０年３月

田野町教育委員会

序

田野町教育委員会は、宮崎県の委託を受けて昭和58年度から前平地区県営農地開発事業地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しました。本書は、昭和59年度に実施した芳ケ迫第２遺跡・芳ケ迫第３遺跡・札ノ元遺跡の発掘調査の概要報告書です。

本年度調査では、縄文時代や旧石器時代の石器や土器が多量に出土し、住居址や集石・土坑等も発見されました。また、13世紀頃の土器等も発見されております。これらは、宮崎県における貴重な研究資料になることと存じます。

調査は、宮崎県教育委員会をはじめ奈良教育大学教授市川米太氏、京都産業大学教授山田治氏・北九州市立自然史博物館館長太田正道氏・学芸主査藤井厚志氏等の御指導と多大の御協力によって行なわれました。

なお、発掘調査に際しましては、中部農林振興局・県農業開発公社・地元町民各位から積極的な御協力をいただきました。心から御礼を申し上げます。

昭和60年３月31日

田野町教育委員会

教育長　種子田　栄　幸

例　言

1. 本書は、田野町前平地区の県営農地開発事業に伴い、昭和59年度に実施した芳ケ迫第２遺跡・芳ケ迫第３遺跡・札ノ元遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 発掘調査は、田野町教育委員会が主体となり、田野町教育委員会嘱託寺師雄二が担当した。
3. 本書に使用した図面の作成は、寺師・[redacted]があたり、別府大学学生的場丈明・長友郁子の助力を得た。
4. 本書の製図は寺師・染矢があたった。
5. 本書の遺構遺物の写真撮影及び執筆・編集は寺師があたった。
6. 石質の鑑定には、北九州市立自然史博物館館長太田正道氏・学芸主査藤井厚志氏の両氏に御教示を得、陶磁器の鑑定には、佐賀県立九州陶磁文化館学芸課資料係長大橋康二氏の御教示を得た。
7. 出土遺物は、田野町教育委員会で保管している。

本文目次

Ⅰ　はじめに …… 1

1. 調査に至る経過 …… 1

2. 遺跡の立地と環境 …… 1

Ⅱ　調査の概要 …… 4

1. 芳ケ迫第２遺跡 …… 4

2. 芳ケ迫第３遺跡 …… 5

3. 札ノ元遺跡 …… 14

Ⅲ　まとめ …… 27

挿図目次

芳ケ迫第３遺跡

土層図 …… 5

遺構分布図 …… 6

土坑 …… 7

集石遺構 …… 8

出土土器 …… 10・11

旧石器時代の集石遺構 …… 13

札ノ元遺跡

土層図 …… 14

遺構分布図 …… 15・16

土坑 …… 18

集石遺構 …… 19

出土土器 …… 21・23・25

旧石器時代の集石遺構 …… 26

図版目次

図版１　芳ケ迫第３遺跡・札ノ元遺跡　縄文時代早期の集石遺構
図版２　札ノ元遺跡　縄文時代早期の土坑(1)
図版３　札ノ元遺跡　縄文時代早期の土坑(2)
図版４　札ノ元遺跡　縄文時代早期の住居址
図版５　芳ケ迫第３遺跡・札ノ元遺跡　旧石器
図版６　芳ケ迫第３遺跡出土　縄文時代早期土器・石器
図版７　札ノ元遺跡出土　縄文時代早期土器（１）・（２）
図版８　札ノ元遺跡出土　縄文時代早期土器（３）・石器

Ⅰ　はじめに

1.　調査に至る経過

宮崎県宮崎郡田野町において、昭和５７年度から前平地区の県営農地開発事業が行なわれている。それに先立ち、事業区内の埋蔵文化財の調査として昭和５６年４月に分布調査、昭和５７年５月に試掘調査が田野町教育委員会と県文化課によって行なわれた(1)。調査により事業区内に３ケ所の遺跡の存在が判明したため、宮崎県中部農林振興局と埋蔵文化財の保護について協議が行なわれたが、事業施行上札の元遺跡（旧１号地）の一部を除いて現状保存が困難なため、消滅する部分についての記録保存の措置がとられることになった。その結果、芳ケ迫第１遺跡（旧３号地）は昭和５８年度、芳ケ迫第２遺跡（旧４号地）と札ノ元遺跡（旧１号地）は昭和５９年度に行なわれることになったが、昭和５８年度の芳ケ迫第１遺跡の調査中、芳ケ迫第１遺跡の西側に芳ケ迫第３遺跡の存在が判明し、昭和５９年度に発堀調査が行なわれることになった。また、札ノ元遺跡の北東側丘陵上に、昭和５９年度の町の単独事業として入殖者の宅地造成が行なわれることになり、現状保存が困難な部分が、又五郎遺跡として昭和５８年度に田野町教育委員会嘱託伊東但氏によって発掘調査が行なわれた。

前平地区遺跡群のうち、芳ケ迫第１遺跡は昭和５８年度に県文化課主任主事面高哲郎氏によって発掘調査され、すでに概要が報告されている(2)。そして昭和５９年度は、工事が行なわれる西方から芳ケ迫第３遺跡、芳ケ迫第２遺跡、札ノ元遺跡の順に発掘調査を実施した。調査は、田野町教育委員会が主体となり、田野町教育委員会嘱託寺師雄二が担当した。

註(1)　面高哲郎・長津宗重「前平地区遺跡発掘調査報告」宮崎県埋蔵文化財調査報告書第２６集　1983。

註(2)　面高哲郎「芳ケ迫第１遺跡ー県営農地開発事業前平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概報ー」田野町文化財調査報告書第１集　1984。

2.　遺跡の立地と環境

田野町は、宮崎県の中南部に位置し、宮崎市より南西約２０㎞の田野盆地を中心とした町である。田野盆地は、地形的には南那珂山地に属し、標高200ｍ以下の台地を形成しており、北東部は宮崎平野に臨む凹地状の小盆地である。この田野盆地を形成する山地のうち、田野町の北東部から南西部へは荒平山・前平山などの600ｍ台の山地が連なり、急斜面を北に向けている。

前平地区は、前平山の北西裾に位置し、山裾の扇状地が井倉川の支流によって開析された低丘陵や丘陵性台地が北西へ延びる地域であり、遺跡群はこの丘陵上及び山裾端部の斜面に立地している。

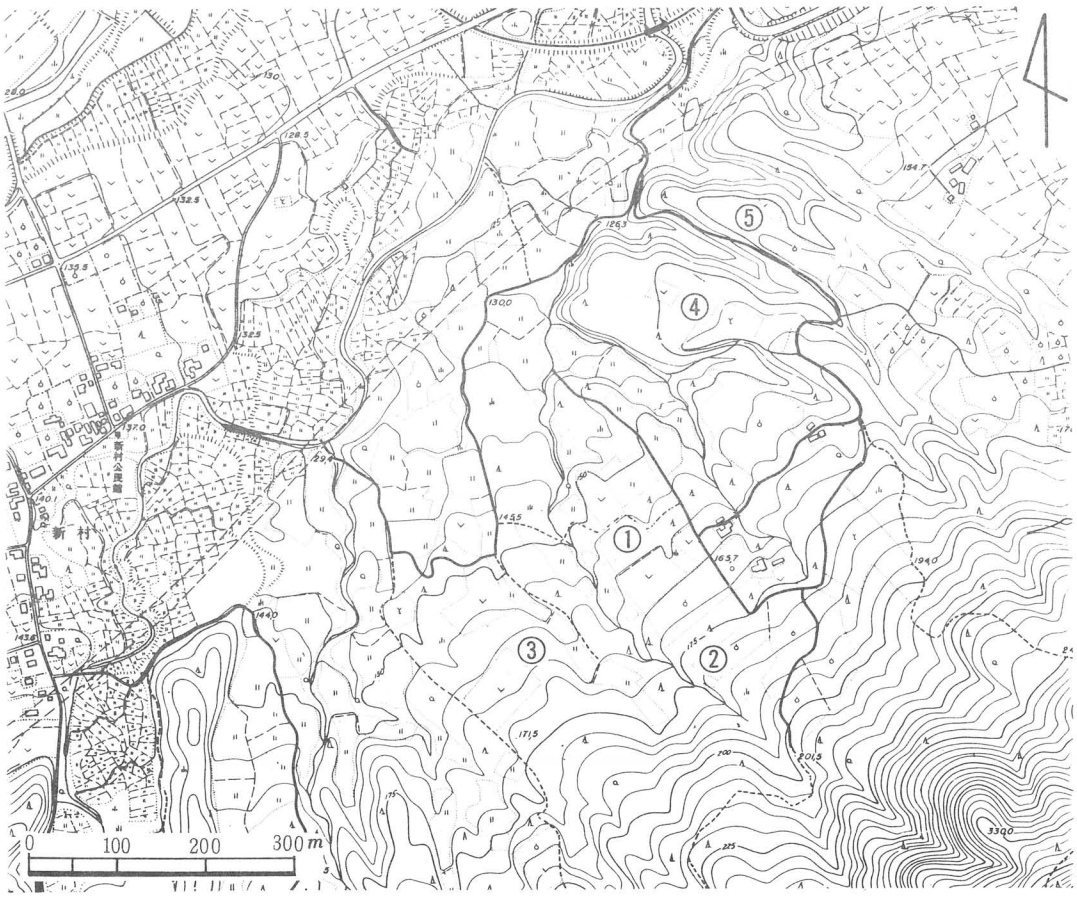
また、現在まで田野盆地内においては２０数ケ所の遺跡の存在が確認されているが、発掘調査が行なわれた遺跡は僅かである。旧石器時代に関しては、ナイフ形石器を出土した萩ケ瀬（大学

実習林入口）遺跡が知られ、縄文時代では後期の青木遺跡[1]や黒草遺跡[2]が知られている。弥生時代[3]・古墳時代の遺跡はあまり知られていないが、これは現在までの発掘調査等が少ないことに起因すると思われる。

註(1) 宮崎県教育委員会「九州縦貫自動車道（宮崎線）関係遺跡分布調査報告書」　1968。

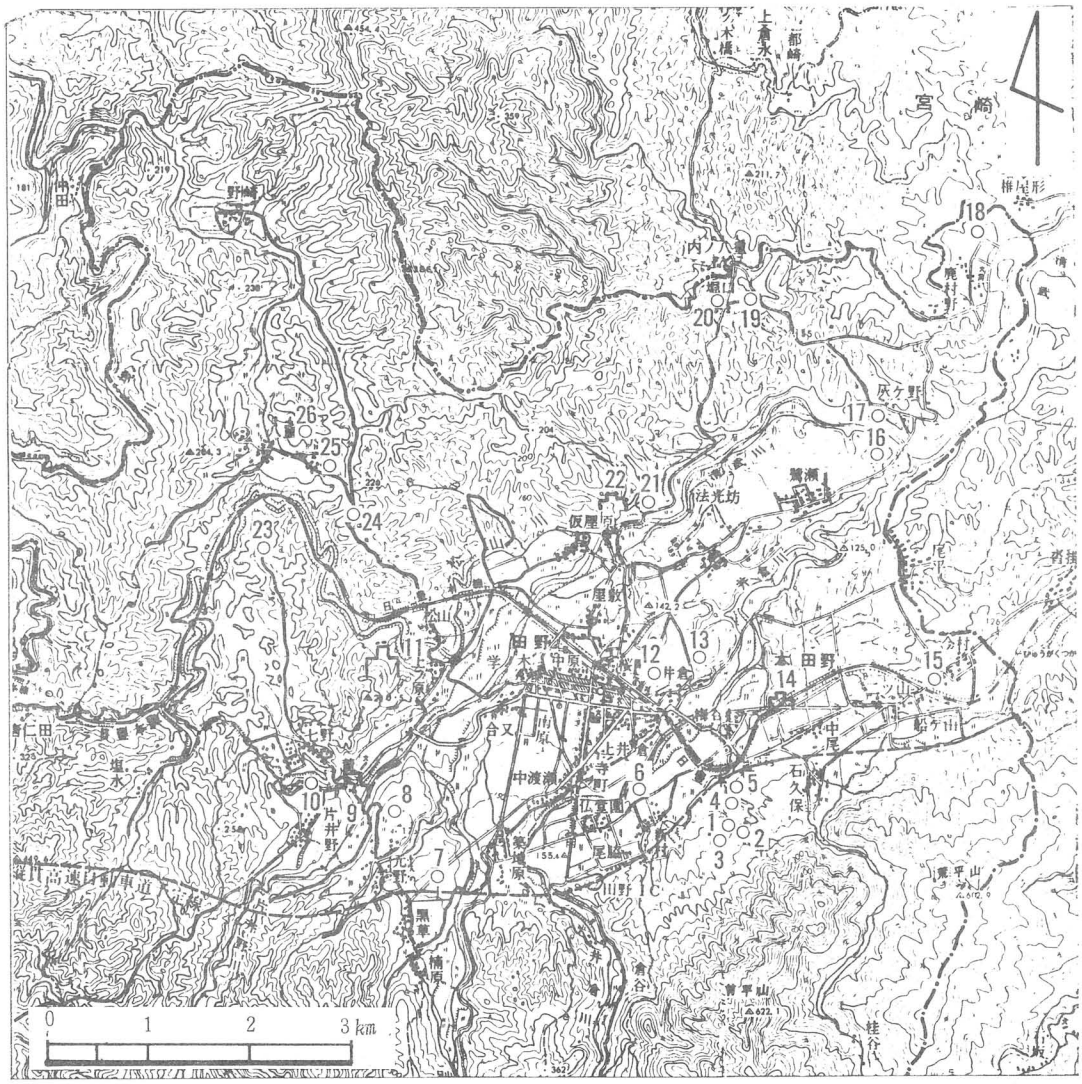
註(2) 鈴木重治「宮崎県田野町青木遺跡の調査」日本考古学協会昭和３８年度大会研究発表要旨　1963。

註(3) 北郷泰道「黒草遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書(3)』宮崎県教育委員会　1979。



第１図　前平地区の遺跡と周辺の地形

①芳ケ迫第１遺跡　②芳ケ迫第２遺跡　③芳ケ迫第３遺跡　④札ノ元遺跡　⑤又五郎遺跡



第２図　前平地区遺跡群の位置及び周辺遺跡

1. 芳ケ迫第１遺跡　2. 芳ケ迫第２遺跡　3. 芳ケ迫第３遺跡　4. 札ノ元遺跡

5. 又五郎遺跡　6. 青木遺跡　7. 黒草遺跡　8. 高野原地下式横穴　9. ヒダカン城址

10. 片井野遺跡　11. 天建神社址　12. 桜町遺跡　13. 井倉洞穴遺跡　14. 梅谷城址

15. 船ケ山遺跡　16. 灰ケ野遺跡　17. 灰ケ野地下式横穴　18. ズクノ山遺跡

19. 堀口Ｂ遺跡　20. 堀口Ａ遺跡　21. 萩ケ瀬遺跡　22. 田野城址　23. 丸野遺跡

24. 前畑遺跡　25. 八重Ａ遺跡　26. 八重Ｂ遺跡

Ⅱ　調査の概要

1.　芳ケ迫第２遺跡

遺跡の立地と概要

本遺跡は、前平山の裾部にあたる北向きの斜面に位置しており、芳ケ迫第１遺跡は東南へ約150ｍの距離である。

前平地区では、昭和４５年の九州縦貫自動車建設に伴う分布調査によって、箱式石棺の確認が報告されている(1)。しかし、昭和５６年の分布調査においてはその所在地が判明せず、昭和５７年の試掘調査においても前平地区４号地遺跡として調査の対象となったが未調査に終り、箱式石棺の実体は不明であった。そこで、箱式石棺の存在が予想される旧４号地を芳ケ迫第２遺跡として発掘調査を行ない、箱式石棺をアカホヤ層上面で確認し記録保存することを目的とした。発掘調査は昭和５９年７月２０日から７月２６日まで実施した。

本地点は現況が杉林であったので、杉を約 1300 ㎡伐採し重機によって樹根を処理した。そして、重機と人力を併用しながらアカホヤ層上面の黒色土を除去した。表土面では土師器片が数点採集されたが、斜面に沿ったアカホヤ層上面までのテストトレンチでは、撹乱が激しく包含層の確認はできなかった。

約 1000 ㎡の調査を行なったが、箱式石棺は確認できなかった。そこで、調査区の拡大を検討したが、費用や調査期間等の諸事情を考慮して調査区の拡大は不可能と判断し、発掘調査を終了した。また、アカホヤ層上面において遺物が出土したため、１０ｍ×１０ｍのグリッドを設定して遺物の取り上げを行なった。

遺構と遺物

アカホヤ層上面まで全面掘り下げた段階で、アカホヤ層中に掘り込む状態で３０数基の円形の土坑が確認されたが、全て直径１ｍ前後の円筒形で遺物も含んでいなかった。

前平地区は、戦後の入殖者が開墾してサツマイモを栽培しており、本地点も杉林になる前はサツマイモの畑であったという入殖者の助言と実見により、サツマイモの貯蔵穴と判断した。また、アカホヤ層も開墾や杉の樹根等によって撹乱を受けており、出土遺物を伴う遺構等は検出されなかった。

出土遺物は、縄文時代早期の土器、土師器、中国陶磁（青磁・白磁）、陶器（常滑・備前）、東播系のもの等であり、その他刃子、石錘、土錘、鉱滓も出土している。出土土器はほとんど破片であるが、陶磁器類は鑑定の結果１３～１４世紀のものであることが判明した。

註(1)　宮崎県教育委員会「九州縦貫自動車道（宮崎線）関係遺跡分布調査報告書」　1968。

2. 芳ケ迫第３遺跡

調査区の設定と概要

芳ケ迫第３遺跡は、芳ケ迫第１遺跡が位置する丘陵の西隣りの丘陵上に位置し、前平地区遺跡群では西端の遺跡にあたる。

昭和５８年度の芳ケ迫第１遺跡の発掘調査中に行なわれた試掘調査において、アカホヤ層上の耕作土と黒色土層が撹乱を受けていることが判明したため、無遺物層であるアカホヤ層までを重機を使用して剝ぐことにした。アカホヤ層まで徐去した後、焼石がみられたので重機の使用をやめ、この面で傾斜に直行する東西に長い２m×１０mのトレンチを入れ、アカホヤ層より下の土層を確認した。さらに、同面で１０m×１０mのグリッドを設定し、南から北へＡ・Ｂ……Ｆ区、東から西へ１・２・３区と呼称することにし、地形測量を行なった。

調査によって、縄文時代早期の集石遺構・土坑、縄文時代晩期の土坑、旧石器時代の集石遺構等が検出され、それに伴う遺物が出土した。発掘調査は、昭和５９年５月１０日から７月２０日まで行ない、約 1200 m^2を調査した。

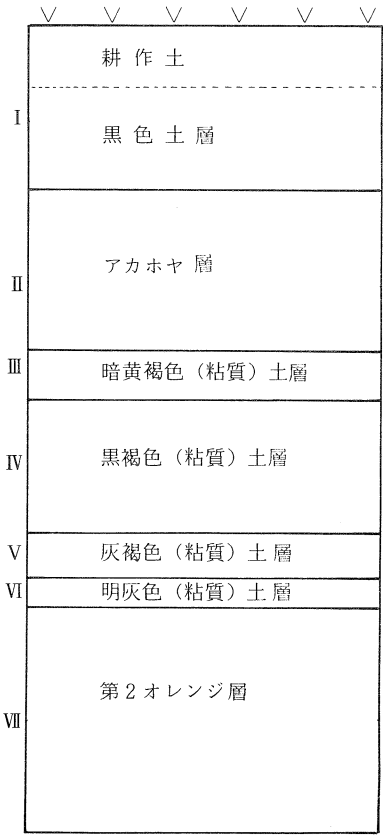
包含層の状態

本遺跡での基本層序は、第Ⅰ層が耕作土が混入した黒色土層、第Ⅱ層がアカホヤ層であり、順に第Ⅲ層（暗黄褐色土層）、第Ⅳ層（黒褐色土層）・第Ⅴ層（灰褐色土層）、第Ⅵ層（角礫を含む明灰色土層）第Ⅶ層（第２オレンジ層）となっている。

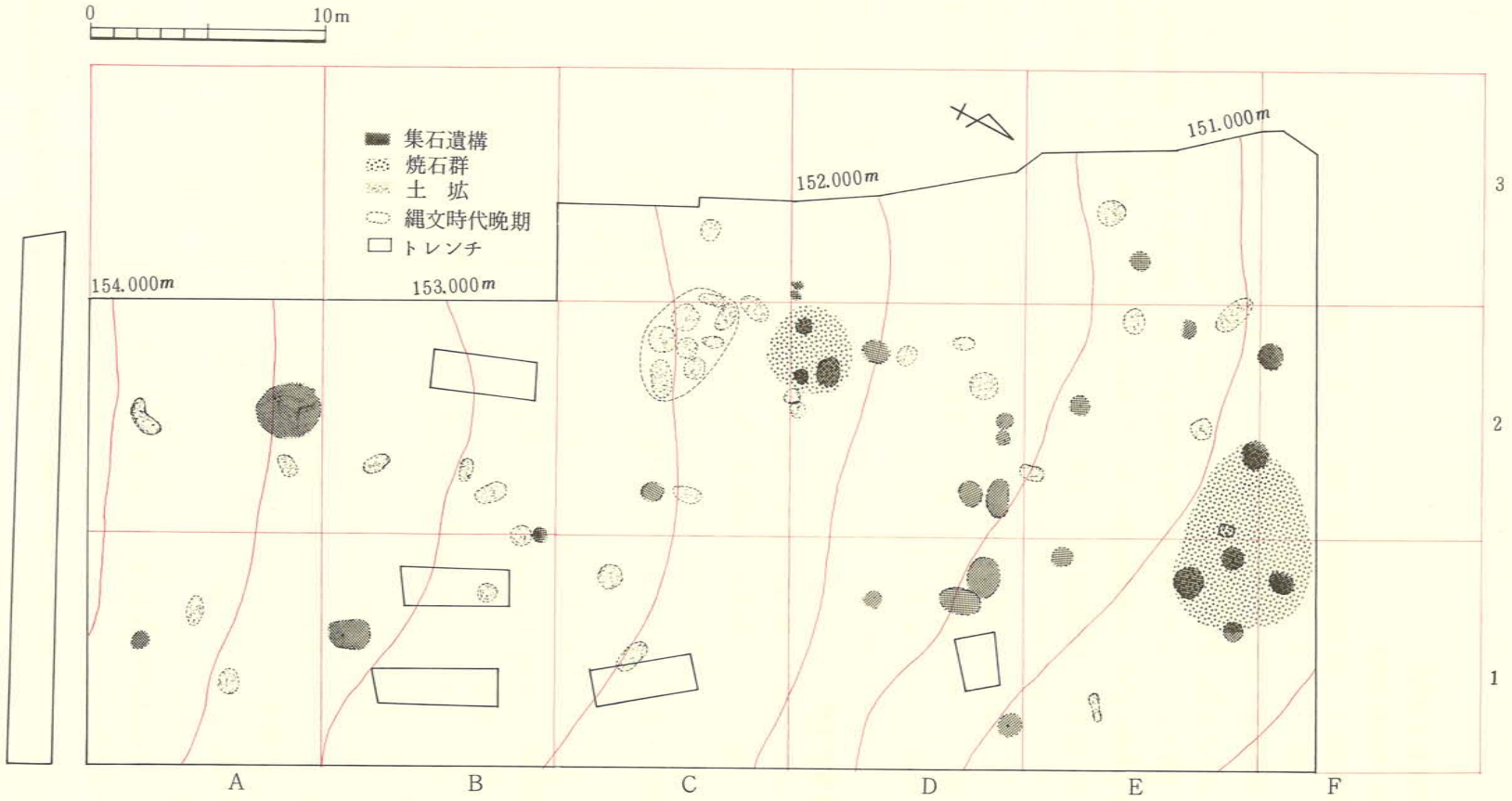
第Ⅲ層（アカホヤ層）は遺跡全体に５０～６０cmの厚さで堆積しており、第Ⅳ層以下は安定した土層を形成している。しかし、第Ⅵ層はトレンチでは層として確認されたが途中で消滅しており、角礫を多量に含んでいることから土石流の可能性が強い。

縄文時代晩期の土坑は、第Ⅲ層上面で遺物を伴って検出され、縄文時代早期の集石は第Ⅲ層・第Ⅳ層中で検出された。また、縄文時代早期の土坑は第Ⅴ層上面を遺構確認面として検出されたが、掘り込み面と思われる第Ⅳ層中では確認できなかった。

縄文時代晩期の遺物は、第Ⅲ層上面で確認された土坑の埋土中からのみ出土しており、ほとんどが土器である。



第３図 芳ケ迫第３遺跡の基本層序



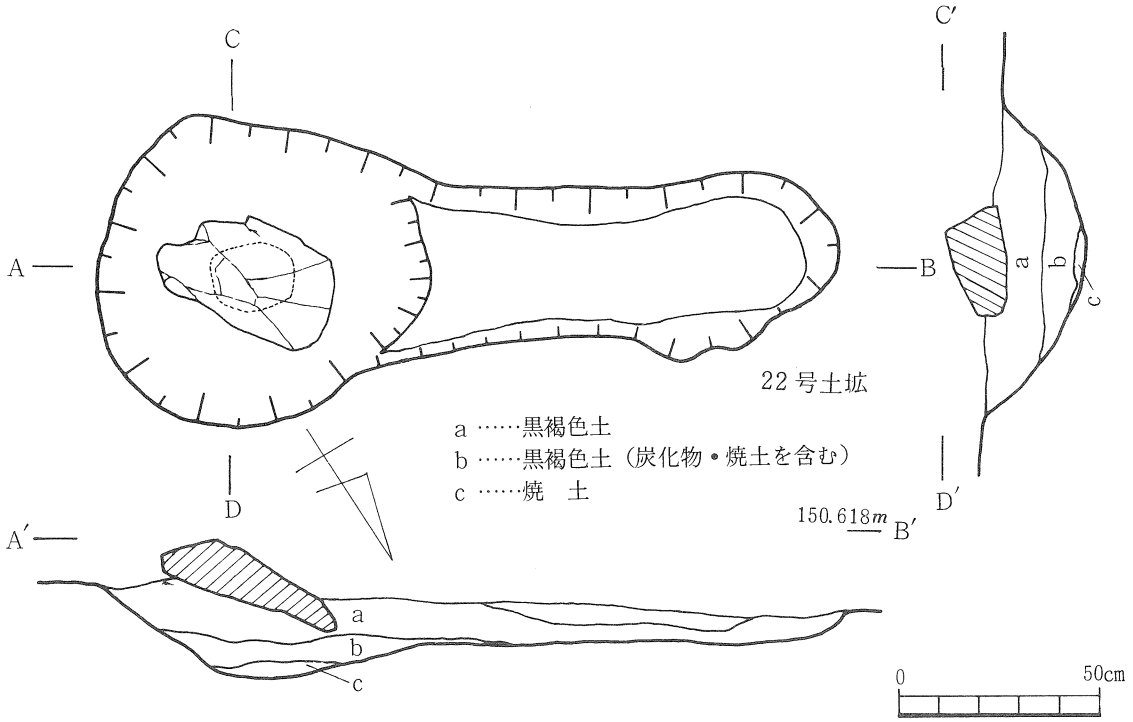
第4図　芳ケ迫第3遺跡遺構分布図（縮尺 1／300 ）

また、縄文時代早期の遺物は土器・石鏃・石斧・磨石等であり、第Ⅲ層・第Ⅳ層中から出土している。さらに、無遺物層の第Ⅴ層・第Ⅵ層下の第Ⅶ層（第２オレンジ層）直上で、石核・剥片を伴って旧石器時代の集石遺構が検出され、剥片先頭器１点も同面で出土している。

縄文時代の遺構

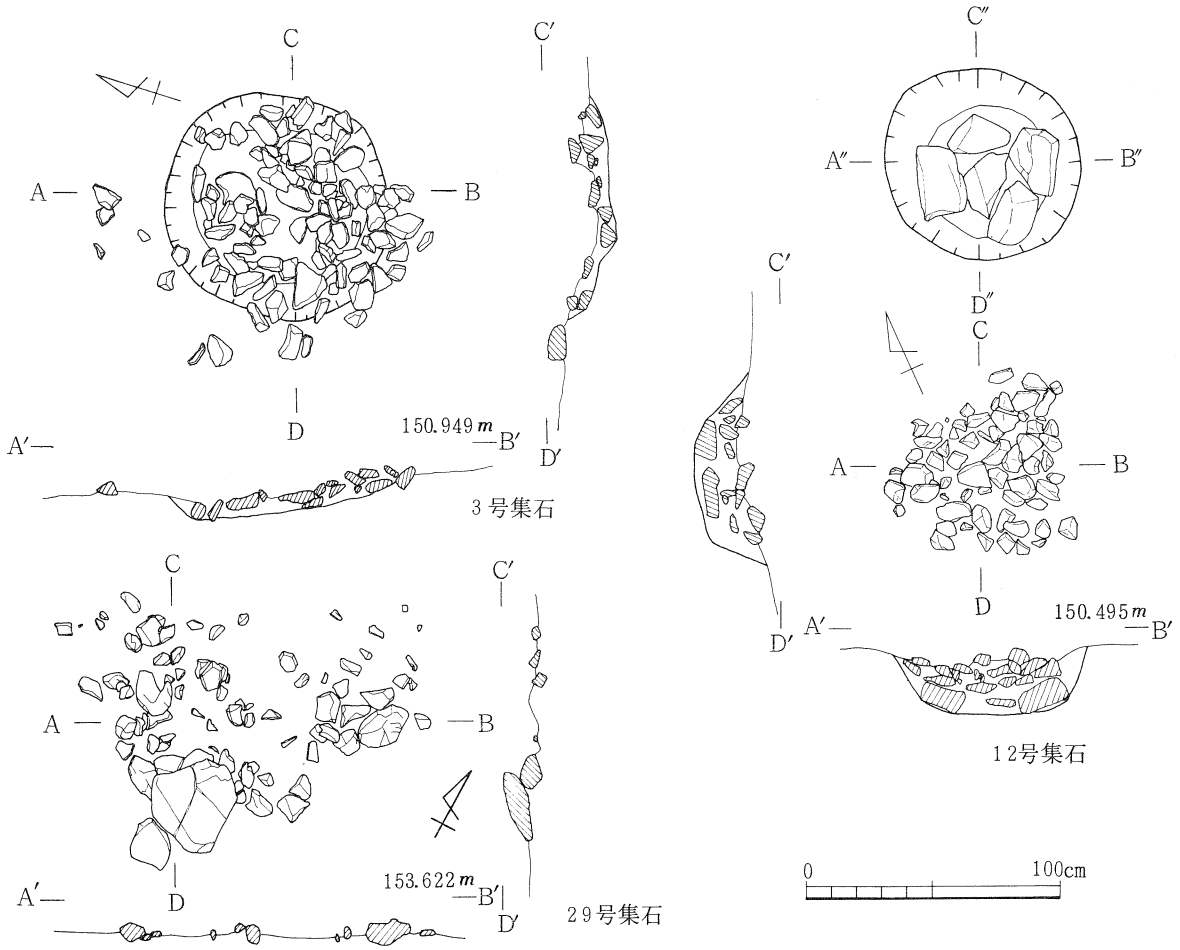
縄文時代の遺構は、集石遺構と土坑が検出されている。

土坑は、縄文時代早期のもの２６基と縄文時代晩期のもの８基か検出された。縄文時代早期の土坑は、掘り込み面があると思われる第Ⅳ層中では確認が困難であり、遺構確認面の第Ⅴ層上面で、第Ⅴ層に掘り込む状態で検出された。形態は様々であるが、埋土は全て第Ⅵ層の黒褐色土であり、炭化粒を含む土坑や小礫を含む土坑も数基存在する。その中で注目されるのは、２２号土坑である。形状はスプーン状を呈し、埋土は他の土坑と同様黒褐色土であるが、凹部には炭化粒・焼土粒を含む堅く締まった黒褐色土が堆積し、底には焼土が堆積している。また、埋土中には、長軸約４０cmの角礫も検出された。この凹部に焼土を持つタイプの土坑は、本遺跡では１基のみである。縄文時代晩期の土坑は、Ｃ－２区に集中して検出され、埋土中には晩期の遺物のみを伴っている。埋土はアカホヤを含む暗黄褐色土で、炭化物等は含んでおらず、第Ⅱ層（アカホヤ層）上から掘り込まれたものの底の部分ではないかと思われる。



第５図　芳ケ迫第３遺跡土坑実測図

集石遺構は、全て縄文時代早期に属するものであり、大小様々であるが掘り込みを持つものと持たないものに大別され、前者が１９基、後者が１０基検出された。その他、掘り込みを持つ集石遺構を含んだ焼石群が２ケ所で確認された。また、掘り込みを有するタイプの集石遺構には、掘り込み内に配石を有するものが数基存在する。構成する礫は、砂岩等の円礫・角礫であり、熱を受けて赤変したり脆くなったりしている。掘り込み中の埋土には炭化粒が観察されるものが多いが、焼土は検出されない。掘り込みを有する集石遺構の規模は直径１m前後のものが多く、深さ数１０cm程度の円形のすり鉢状のプランが平均的である。出土層位は、第Ⅲ層下部から第Ⅳ層上部に集中している。また、２ケ所の焼石群は第Ⅲ層下部で確認されたが、ボーリングや焼石の集中度等によって 堀り込みを有するタイプの集石遺構を数基含むことが判明した。

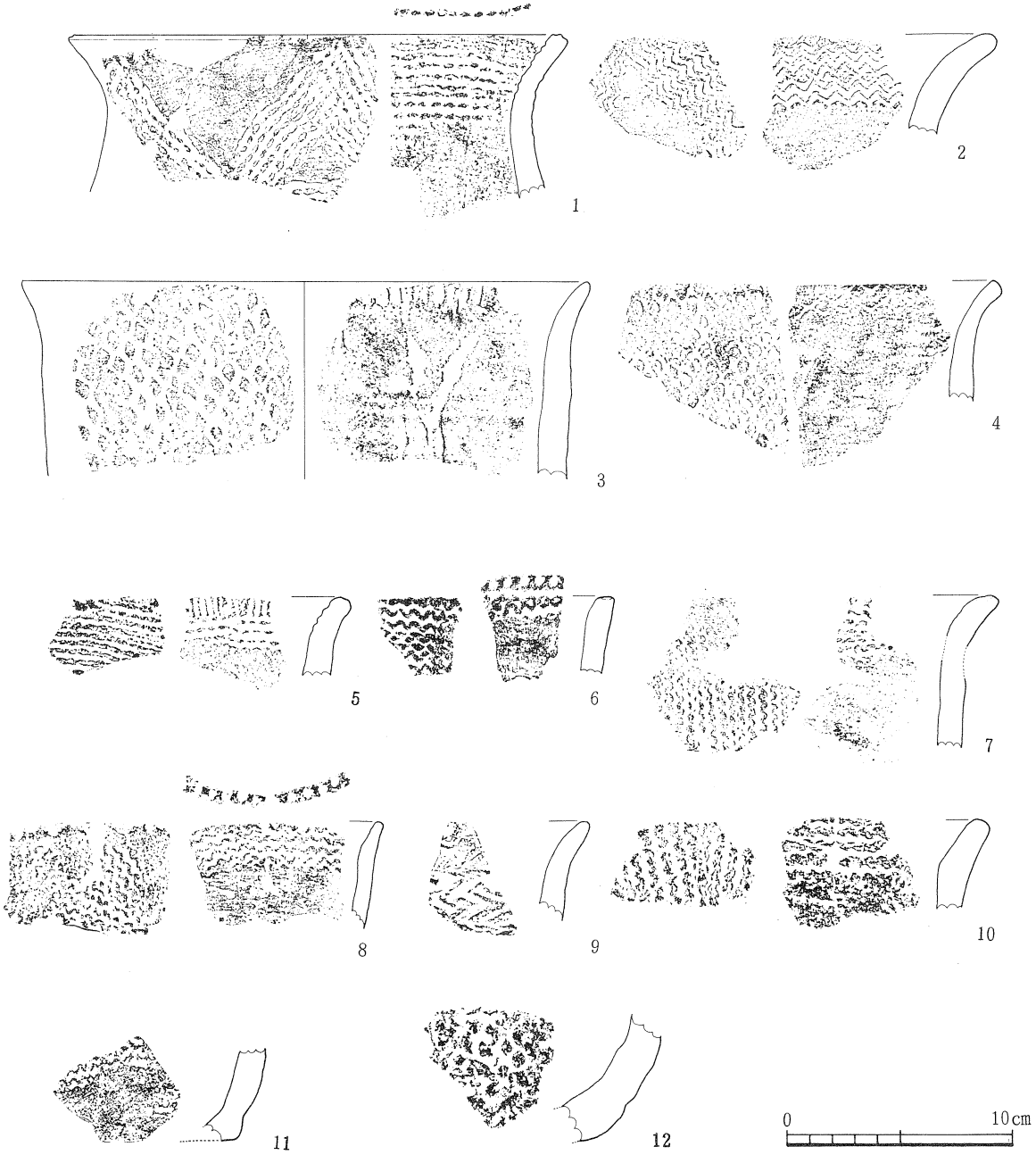


第６図　芳ケ迫第３遺跡集石遺構実測図

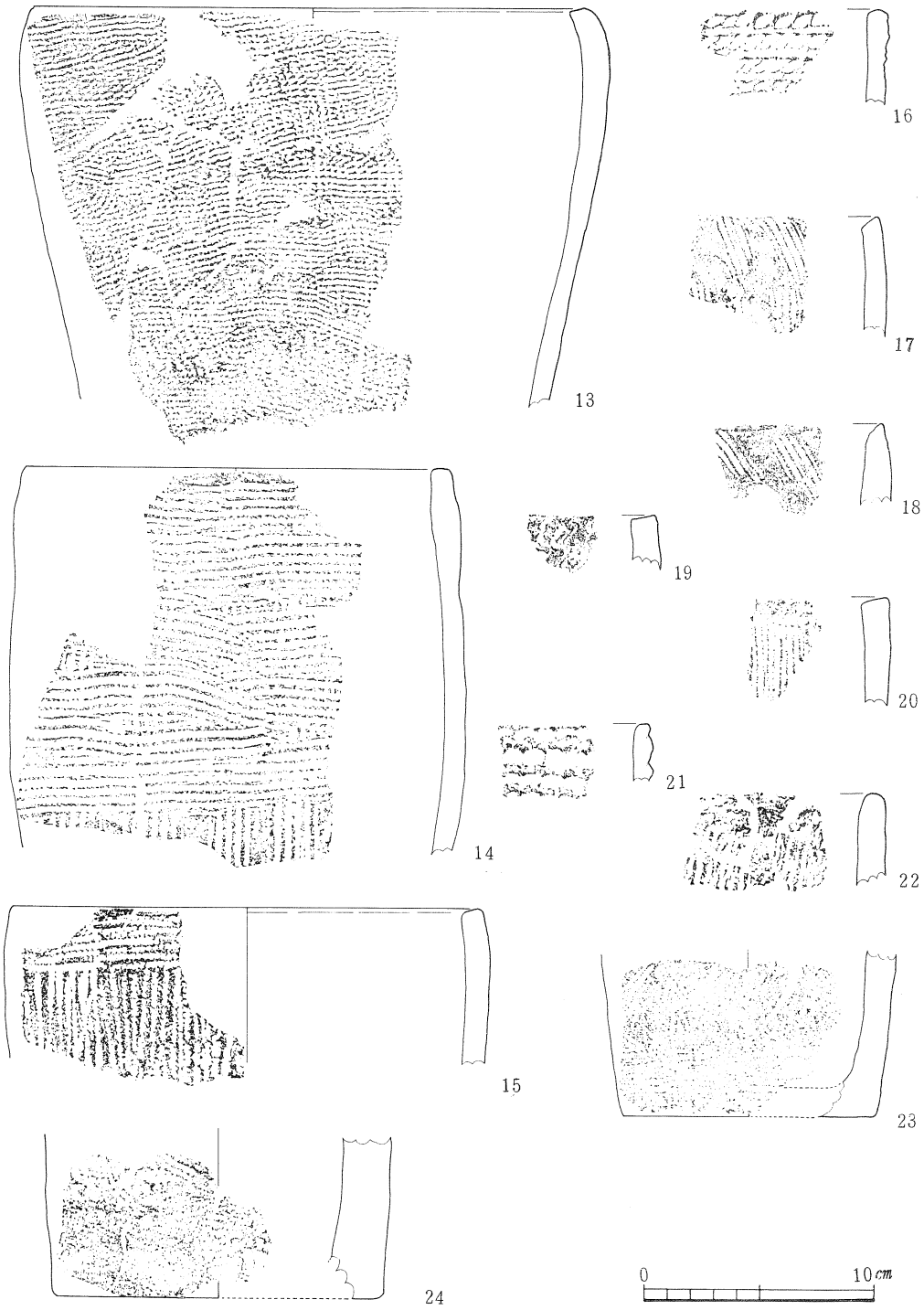
縄文時代早期の遺物

本遺跡で出土した縄文時代早期の遺物は土器と石器である。土器は、押型文土器と型式不明の土器が出土している。

第5図は押型文土器であり、楕円押型文（1・3～5・12）と山形押型文（2・6～11）がある。1は口縁部が外反し、胴部が膨む器形である。外面の施文は、幅2.5～3cmの楕円押型文帯が鋸歯状に口縁部を巡り、胴部以下は横走するものと思われる。内面は楕円押型文が横走し、口唇部にも施文される。内面の頸部以下は、縦位のヘラ削り調整であるが、外面及び内面口縁部は横位のナデ調整である。2は口縁部が外反し、端部が丸みを持って終る。外面は、山形押型文帯が口縁部を鋸歯状に巡ると思われる。内面は、3条ずつ2回施文して文様帯を構成している。調整は、外面及び内面口縁部が横位のナデ調整で、頸部以下は横位の粗いヘラ削り調整である。1・2の外面及び内面の文様帯は、3～4条を1単位として2回施文し、6～8条の文様帯を構成している。3は口縁部が薄くなりながら外反し、口唇部が丸みを持って終る。外面は長軸約1cm程度の楕円文を縦位に施文し、内面口唇部直下には浅い凹線文を施文している。内面には、指頭によると思われるナデ調整が横位に施される。4も口縁部は薄くなりながら外反するが、口唇部には平坦面を持つ。長軸7mm前後の楕円押型文を外面に縦走させ、内面口唇部直下にも横位に施文している。右上がりの連続指圧によって口縁部の外反整形を行ない、その後横位のナデ調整を内面に施している。胎土には長石が目立ち、焼成は良好である。5は僅かに外反する口縁部であり、外面には楕円押型文の原体を使用して条痕文様の施文を施している。内面の口唇部直下には縦位に沈線を巡らせ、その下に3条の楕円押型文を巡らしている。色調は浅橙色で内面はナデ調整である。6の口縁部は直行しており、外面には山形押型文が横走する。口唇部にはU字状の刻目が施され、内面の口唇部直下に1条の山形押型文を施文する。内面は横位のナデ調整であり、焼成は良好である。7の外面には山形押型文が縦走し、内面は横位に施す。口唇部には棒状施文具による刺突文が施される。外面の口唇部直下及び内面の頸部以下はヘラナデ調整が施される。8の口縁部は僅かに外反しており、外面には斜位の山形押型文を施し、上からナデ消している部位も観察される。口唇部には棒状施文具による刺突文を巡らせ、口唇部直下には3条の山形押型文を施文する。外面はナデ調整であるが、内面の頸部以下は横位のヘラ削り調整である。胎土には雲母を含み焼成は良好である。9は外面に大型の山形文を斜走させているが、他の部位の施文はない。内面は指圧による整形の後、横位のナデ調整を施す。胎土には長石を含み、焼成は良好である。10の外面は僅かに外反し、幅広の山形押型文を縦位に施文する。内面に稜を有し、その上部に山形押型文を巡らせる。稜以下は横位のナデ調整を施す。石英粒が目立ち、長石も含む。外面は浅橙色を呈し、内面の色調は暗褐色である。11は押型文土器の平底の底部である。外面は、底部直上3cm前後が無文で横位のヘラ削り調整が施され、その上部に山形押型文が横走する。内面はナデ調整である。胎土には雲母が目立ち、焼成は良好である。12は大粒の楕円押型



第７図　芳ケ迫第３遺跡出土土器実測図 (1) （縮尺１／３）



第8図　芳ケ迫第3遺跡出土土器実測図(2)(縮尺1／3)

文土器の底部である。器形は平底に近い丸底であり、外面は火を受けたためか風化が著しい。内面はナデ調整である。色調は内外面ともに赤褐色を呈する。

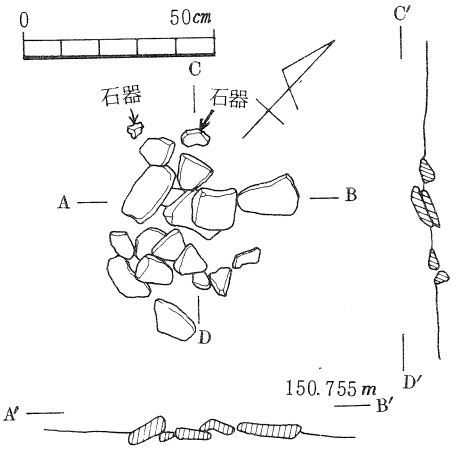
第6図は、型式不明の土器群である。 13 は口縁部が肥厚しながら内湾する特徴を有する。外面には貝殻腹縁による押引き文を左から右へ施文する。内面の口縁内湾部と口唇部は横位のヘラ研磨調整であるが、それより下位は指頭によるナデ調整である。胎土には石英粒が目立ち、焼成は良好で堅牢な感じを与える。14 は胴部が膨み上半部が内傾する器形である。外面の施文は、4条を1単位とする貝殻条痕を間隔を持って縦位に巡らせ、その後上半部のみ同様の貝殻条痕を横位に密に施文する。口唇部及び内面全面には、指頭による丁寧なナデ調整が施される。色調は浅橙色で、胎土には石英粒が目立つ。15 は口縁部が僅かに内傾し、円筒形を呈するものと思われる。口縁部外面には、貝殻による連続刺突文を横位に 6～8条施文し、その下部には同様の施文を縦位に間隔を持って施す。口唇部と内面は横位のヘラ研磨調整である。色調は茶褐色を呈し、胎土中に石英・長石は目立たない。16 はほぼ直行する口縁部で、外面にはヘラ状施文具による押引き文を右から左へ施文する。内面は指頭によるナデ調整である。17 は口唇部が平坦で口縁部は内湾する。外面はナデ調整の後、貝殻で引掻くような文様を間隔を持って施文する。口唇部もナデ調整であるが、内面は横位の粗いヘラ削り調整である。18 は、口縁部の器形は異なるが、内外面の調整及び施文は17と同一である。19は小片であるが、口縁部が僅かに内傾する。外面にはナデ調整の後、ヘラ状施文具で流水状の文様を施す。口唇部と内面はヘラ研磨調整で光沢を帯びる。 20 は外面の口唇部直下はナデ調整で、その下部は貝殻条痕文を縦位に施文する。口唇部はナデ調整であるが、内面はヘラによる研磨状の丁寧なナデ調整である。色調は赤褐色で、胎土、焼成は良好である。21の口縁部は直行し、外面には湾曲した爪状の施文具による刺突文を連続施文する。内面は指頭によると思われるナデ調整である。色調は浅橙色で、焼成はやや不良であるが、施文方法や調整等は16に類似する。 22 の外面は起伏があり、縦位に施文された貝殻条痕文も粗く雑である。しかし、口唇部及び内面はヘラ研磨により光沢を帯びる。 23 は円筒土器底部である。外面はナデ調整の後浅い条痕を斜位に施文し、底部直上は横位に巡らす。内面は底部から上方へヘラ削り調整を施す。長石、石英を含むが石英が目立ち、整形・焼成ともに良好である。 24 の外面はヘラナデ調整であり、底部直上は無文であるが上部は斜位の条痕文を施す。内面は縦位のナデ調整である。色調は外面が赤褐色、内面が褐色で胎土には砂粒を多く含むが焼成は良好である。 23 ・ 24の条痕は浅く施文具が貝殻かどうか不明である。

石器は、石鏃・磨石・局部磨製石斧・スクレイパー・石匙・石錘等が出土している。

石鏃・磨石が各々３０数点、局部磨製石斧２点の他はそれぞれ１点ずつ出土している。石鏃は、基部が平基のものが１点の他は全て凹基の基部を有する。凹基鏃は、抉りの形状によってＵ字形・Ｖ字形・ゆるやかな円弧を呈するものに大別される。また全体の形態としては、正三角形状のもの、スリムな二等辺三角形状のもの、正三角形状で側辺部が外へ湾曲するものなどがある。石材としては、黒曜石製が１７点（姫島産１点を含む）、チャート製が１４点と多く、その他サヌカイト・細粒砂岩・珪質頁岩・メノウ等が素材として利用されている。磨石は、数点の粘板岩製のものを除いてすべて砂岩製である。局部磨製石斧は、片面に自然面を残し両側縁及び刃部に擦痕が観察される凝灰質砂岩製のものが１点と安山岩製で断面がレンズ状を呈する刃部だけのものが１点出土している。その他、石匙、石錐はチャート製、スクレイパーは珪質頁岩製である。また、黒曜石製の異形石器が１点出土している。厚めの剝片を利用し、頭部は方形状を呈し３つの刃部は入念な刃潰し加工が施され、脚部も両側辺と基部からＵ字状の抉りが施されている。

旧石器時代の遺構と遺物

縄文時代の調査を終了した後、ベルトに沿って２m×１０mのトレンチを８ケ所設定して第Ⅶ層まで掘り下げた。その結果、Ｅ－２区北側トレンチの第Ⅶ層上面で石核及び剝片を伴った集石遺構が検出された。集石遺構は、砂岩製の偏平礫を用い掘り込みは確認されなかった。出土遺物は、泥質細粒砂岩製の石核１点・スクレイパー１点・剝片数１０点等である。また、集石遺構の実測と併行してＥ・Ｆ－２・３区全面を第Ⅶ層上面まで掘り下げたが、他の集石遺構は検出されなかった。しかし、Ｅ－２区北隅において、肉厚の黒色泥岩製の剝片尖頭器が出土した。



第９図　集石遺構実測図

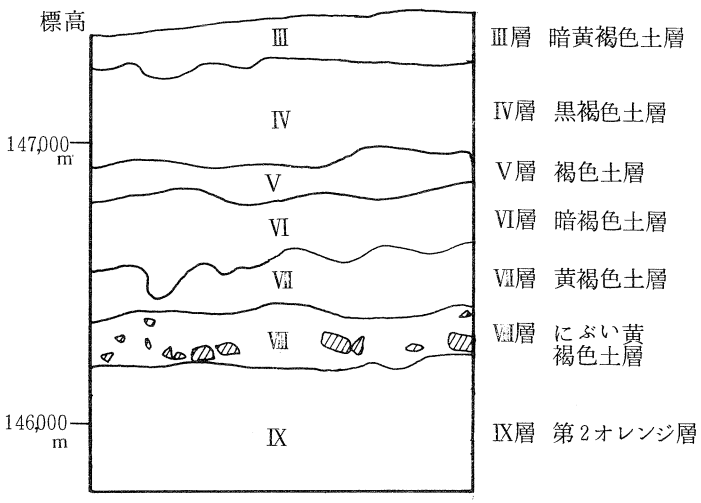
3. 札ノ元遺跡

調査区の設定と概要

札ノ元遺跡は、芳ケ迫等１遺跡より北東へ沢を１つ隔てた丘陵性台地上に位置しており、昭和５７年５月の試掘調査において、１号地として調査された遺跡である。試掘調査により遺跡の大部分がアカホヤ層直上まで削平を受け撹乱していることが判明していたが、今回の本調査においても、重機使用前のアカホヤ層までのテストトレンチでは布痕土器と土師器の破片が数点出土したのみであり、アカホヤ層上の包含層や遺構は確認されなかった。従って、試掘調査で良好な縄文時代早期の遺物や遺構が検出されたアカホヤ層下の調査を中心に行なうことにし、調査区全面をアカホヤ層まで重機を使用して剝いだ。また、地形測量もアカホヤ層除去後の面で行なった。

調査区の調査前の地形は、緩やかな傾斜を持つ最大幅８０mの丘陵性台地であったが、アカホヤ層を除去後は、調査区全体が南から北へ緩やかに傾斜し、東側は平坦面を呈するものの中央部から西側へ向かって傾斜していることが確認された。また、西側では南から北へ凹地が走り、当初１つの丘陵性台地の様相を呈していた丘陵は、アカホヤ層下では連続する２つの小丘陵であったことが確認された。そこで、地形に応じて調査区内に１０m×１０mのグリッドを設定し、南から北へＡ・Ｂ……Ｆ区、西から東へは１・２……７区と呼称することにした。調査面積は約３３００m^2で、昭和５９年７月２６日から１１月３０日まで調査を行なった。また、調査期間中に、県文化課永友良典氏の御指導を得て芳ケ迫第１遺跡の集石遺構の取り上げを行なった。

調査によって、縄文時代早期の集石遺構・土坑・住居址等が検出され、遺物も多量に出土した。

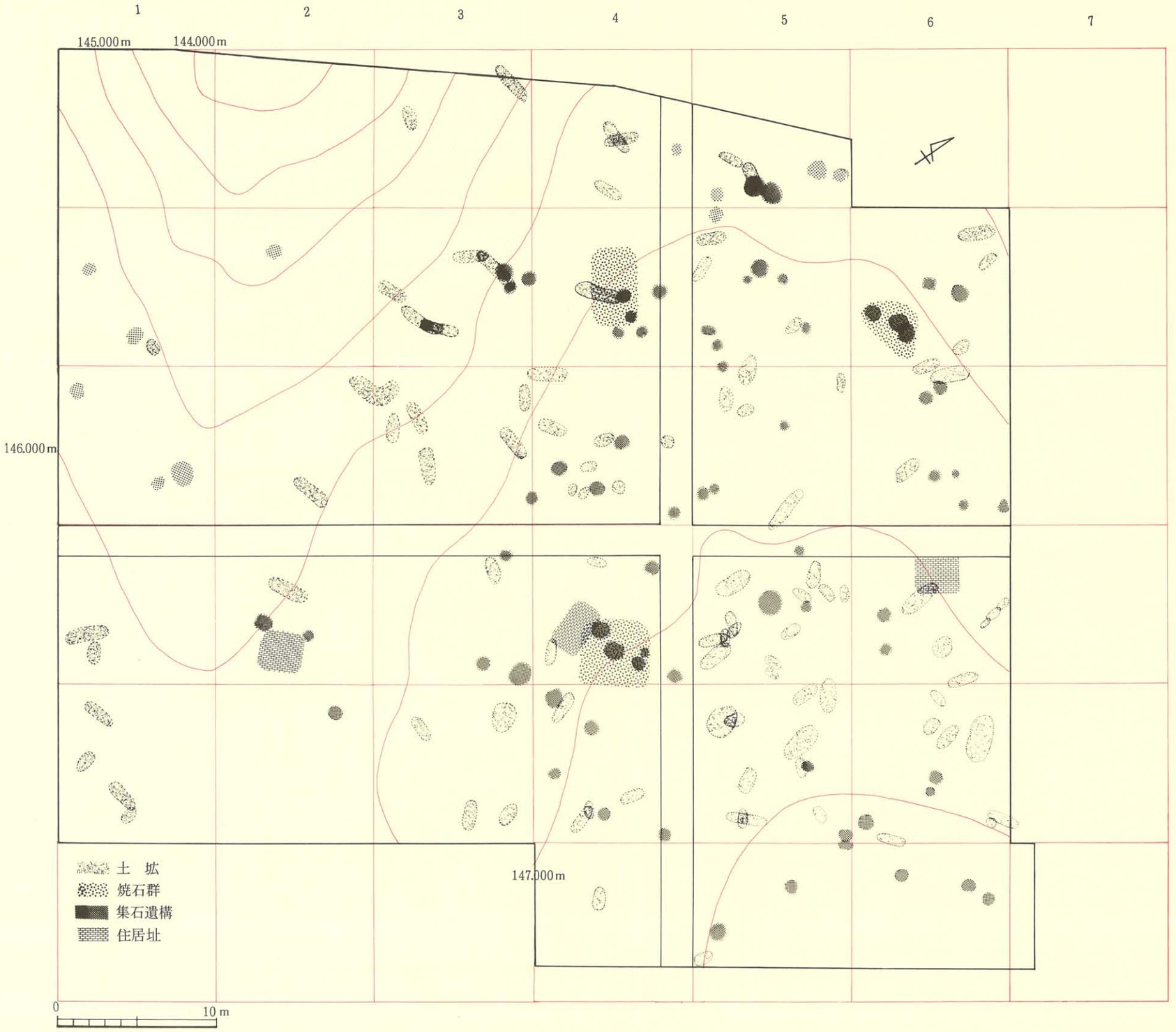


第１図　Ａ－５区北側土層断面図

包含層の状態

本遺跡の基本層序は、第１層が耕作土混入の黒色土層、第Ⅱ層（アカホヤ層）、第Ⅲ層（暗黄褐色土層）、第Ⅳ層（黒褐色土層）、第Ⅴ層（褐色土層）、第Ⅵ層（暗褐色土層）、第Ⅶ層（黄褐色土層）、第Ⅷ層（角礫を含むにぶい黄褐色土層）、第Ⅸ層（第２オレンジ層）、第Ⅹ層（黒褐色土層）となっている。

縄文時代の遺物と集石遺構は



第11図　札ノ元遺跡遺構分布図（縮尺 1／300 ）

第Ⅲ層と第Ⅳ層中より検出され、土坑の大部分は、第Ⅴ層上面を遺構確認面として第Ⅴ層以下に掘り込む状態で検出された。実際の掘り込み面は第Ⅴ層より１０～２０cmの程度上の第Ⅳ層中であることが土層断面で確認されたが、埋土が全て黒褐色土であるため、第Ⅳ層を掘り下げる段階では、土坑の掘り込み面での検出は困難であった。また、無遺物層である第Ⅴ層・第Ⅵ層下の第Ⅶ層中から、石核・剥片等を伴って旧石器時代の集石遺構が検出された。

縄文時代早期の遺構

縄文時代早期の遺構としては、集石遺構・土坑・住居址等が検出された。

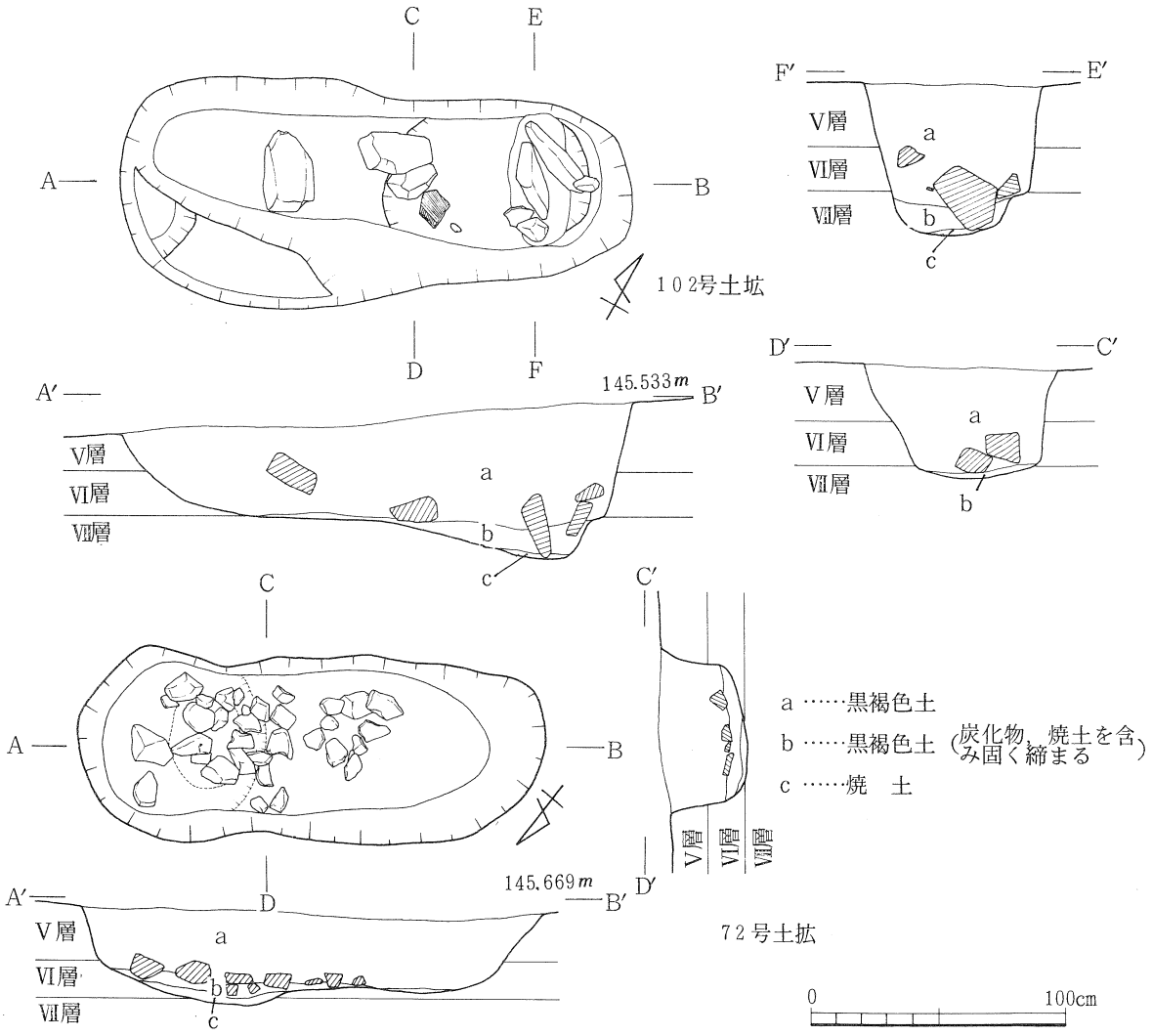
集石遺構は80数基検出されたが、規模の大小はあるものの掘り込みの有無によって２つのタイプに大別され、掘り込み内に配石を有するものも数基存在する。また、掘り込みを有する集石遺構を含む焼石群も数ケ所確認されている。

土坑は110基検出されたが、第Ⅳ層中で検出されたものは数基であり、他は遺構確認面の第Ⅴ層上面で検出された。形態は、円形・長円形など大小様々で、小礫を含むものや炭化粒を含むもの、落し穴状のもの等がある。その中で、断面がスプーン状を呈し、凹部に焼土を有する長円形状の土坑が注目される。また、鹿児島県加栗山遺跡等で確認された連穴土坑も検出された。前者は３０数基検出されたが、ほとんどが長軸120～150cm、短軸40～60cm程度の長円形のもので、断面がスプーン状を呈し、円形状の凹部を有するのが特徴である。深さは、確認面の第Ⅴ層上面から、20～70cmと幅があるが、深いものは第Ⅶ層下部まで掘り込んでいる土坑もある。基本的な埋土は、スプーン状の凹部に２～10 cmの厚さで焼土が堆積し、その上部に炭化物や焼土を含み固く締まった黒褐色土が5～15cmの厚みを持って堆積している。また、凹部の固く締まった黒褐色土の上に偏平な大型の円礫や角礫が検出された土坑が１０数基あり、数基が連続するのも存在する。連穴土坑は２基検出され、焼土を持つ１基はスプーン状断面の土坑と切り合っている。スプーン状断面の土坑は、偏平礫や角礫の他に土器等を伴っていたが、焼土の中では出土せず埋土中か固く締まった黒褐色土の上面で出土したため、調査の段階では埋土中と固く締まった黒褐色土上面又は床面の２つに分けて取り上げた。連穴土坑は埋土中に土器片が出土したが、床面では出土していない。

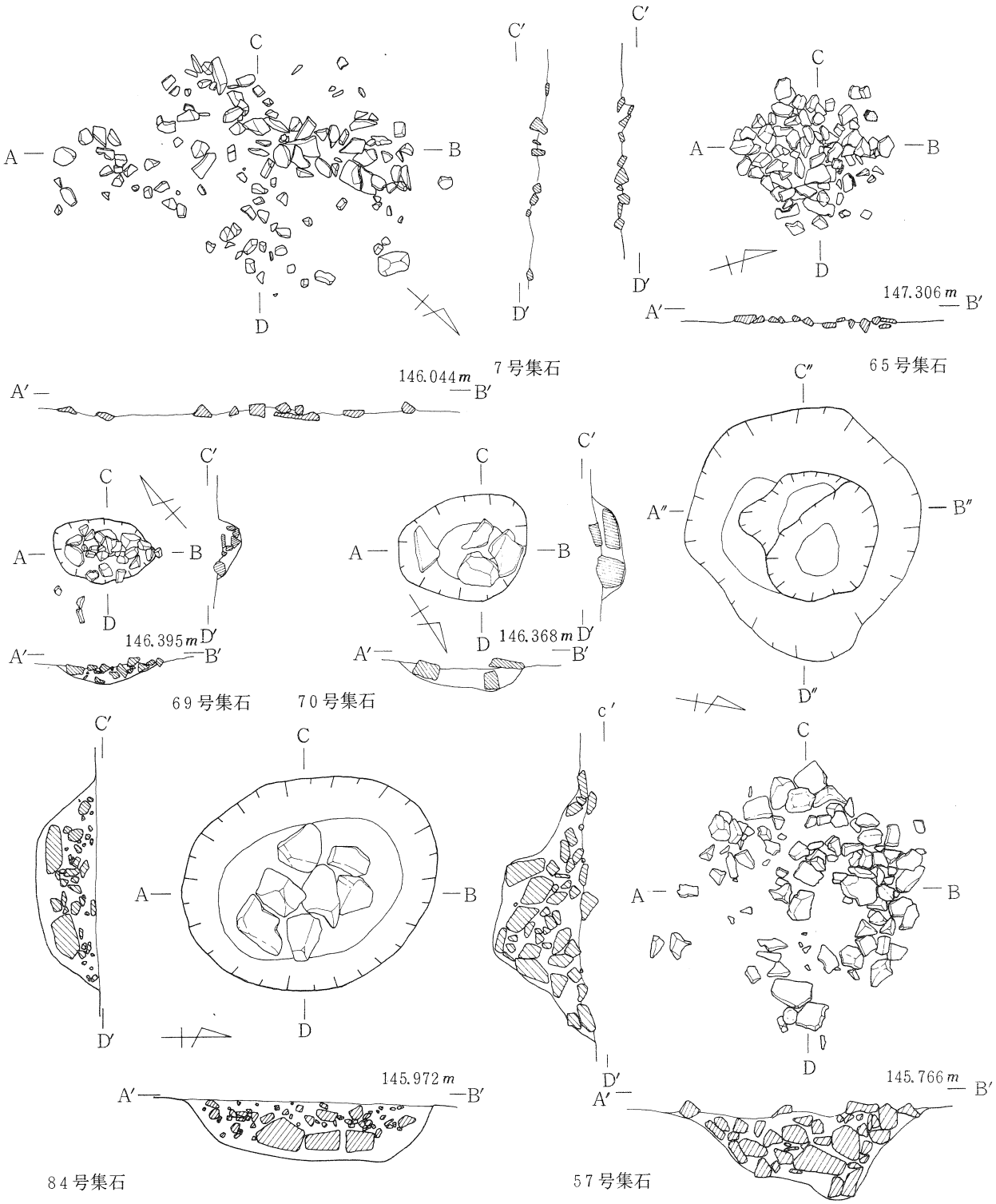
住居址は３基検出されたが、プランが確認されたのは、２m×３mの隅丸長方形のものと2.5m×2.5mの隅丸方形のものである。隅丸長方形プランの住居址内には６基のピットが検出され、住居址外では２基のピットが検出された。掘り込みの深さは１５cmであるが、検出面は第Ⅴ層上面であり、実際の掘り込みが第Ⅳ層中にあると考えられる。また、床面はほぼ平坦である。埋土は第Ⅳ層の黒褐色土であり、土器片は埋土中のみで検出され床面では検出されていない。隅丸方形プランの住居址では３０数基のピットが検出されたが、切り合ったピットがあることや、ピットが深さによって大別できることから建て替えの可能性もある。床面の状態は、中心部の深

さが約２５㎝で四方の壁に向って緩やかに浅くなり壁際では深さ２０㎝前後となる。隅丸長方形プランの住居址と同じく掘り込み面は１０～２０㎝上の第Ⅳ層中と思われるが、掘り下げていく段階では検出できなかった。住居址の埋土中と底部で土器片が出土した。

その他の遺構としては、５～１０㎝の深さで平坦面を持つ円形プランの土坑が数ケ所で土器片を伴って検出されたが、ピットがなく、また規模も直径１～２ｍと小さくその性格は不明である。



第12図　札ノ元遺跡土坑実測図



第13図　札ノ元遺跡集石遺構実測図

縄文時代早期の遺物

縄文時代早期の出土遺物は土器と石器である。

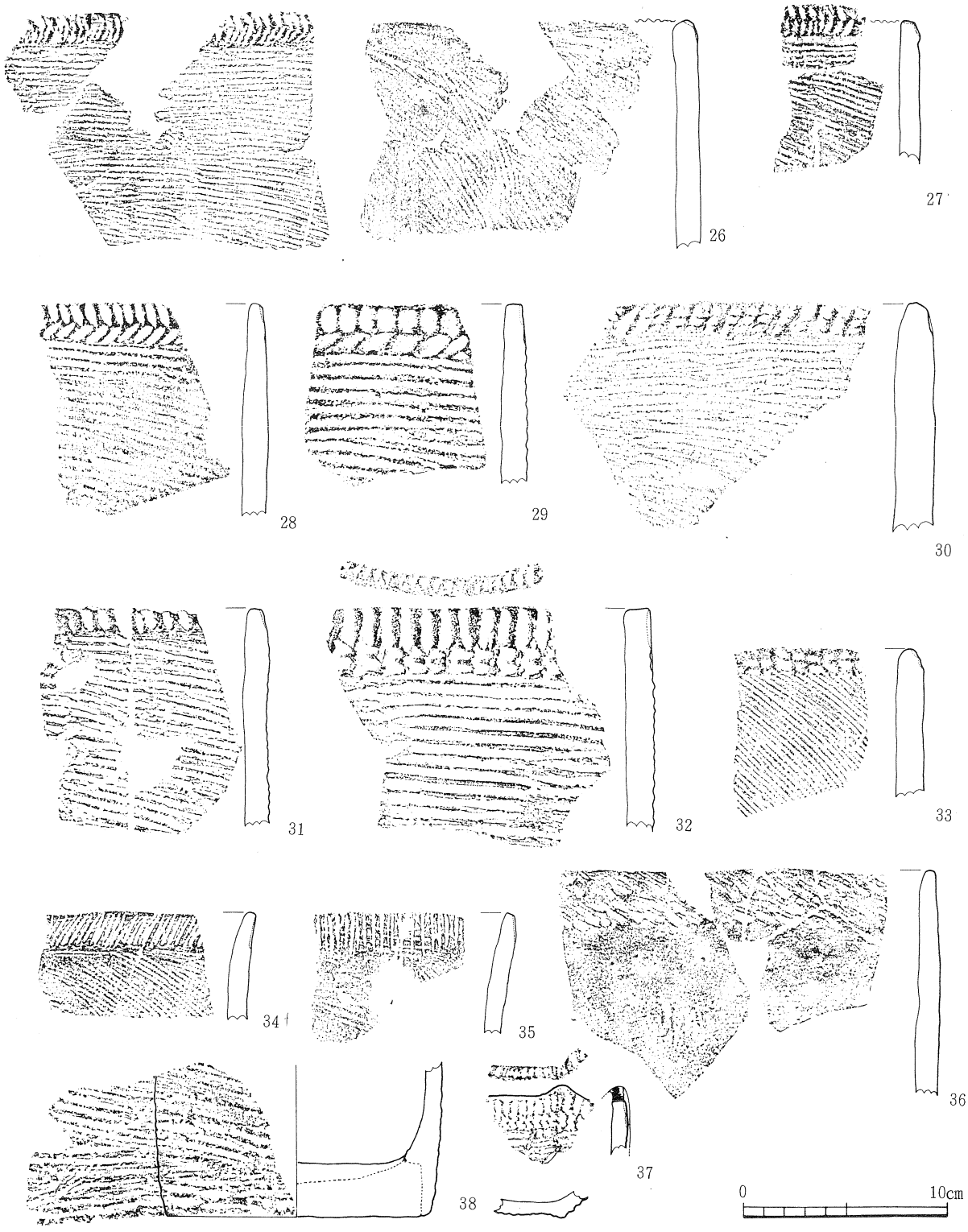
1の器形は、胴部が緩やかに湾曲し、頸部にかけては直行して立ち上り、頸部より外側に屈曲して肥厚した口縁部で終る。口縁は緩やかな隅丸方形状を呈し、四隅は僅かに隆起して波状の口縁形態を呈する。肥厚した口縁部及び2条の突帯を有する頸部には、棒状施文具により沈線文・刺突文が施文される。また、胴部には縄文が施文され、平坦な口唇部には刻目を有する。内面は、全面横位のヘラナデ調整である。2は胴部片であるが、口縁部は外側に屈曲するものと思われる。内面は横位のヘラナデ調整である。3・4・5は、胴部が「く」字形に屈曲して口縁部が緩やかに外反する形態を有する土器である。3の外面は、ナデ調整の後、屈曲部上部から口縁部にかけて棒状施文具で凹線文を巡らせる。内面は指頭による圧痕が顕著である。4・5は同一個体であり、胴部の屈曲部に突帯を有し、突帯には1cm程度の間隔で刻目を施す。突帯上部より口縁部にかけては、ヘラ状施文具で粘土を隆起させ、微隆起線文（みみずばれ文）を施文する。また、口唇部には間延びした山形押型文を施文する。内面は指ナデ調整である。6も3・4・5と同様の器形を呈するものと思われる。外面及び内面口唇部直下に間延びした山形押型文を施文する。内面は指ナデ調整である。7は胴部か張出し、口縁部が外反する器形を呈する。外面には撚糸文を施し、内面は指ナデ調整である。8・9は山形押型文土器である。8は外面に縦位に施文する。口唇部は内傾し、内面は横位のヘラナデ調整である。9は直行する先細りの口縁形態を呈する。外面及び内面口縁部には横位に山形押型文を施文し、内面の口唇部直下には凹線文を巡らせる。10は口縁部が肥厚し平坦な口唇部を持って終るが、全体形は口縁部が広がる円筒形を呈すると思われる。外面には、貝殻によると思われる浅い刺突文を間隔をあけて横位に施文する。内傾する口唇部及び内面は、研磨状の丁寧なヘラナデ調整を施す。11は直行する口縁部で、外面には横位に貝殻条痕文を施文する。内面は横位のヘラナデ調整である。12は口縁部が内傾するが、全体形は円筒である。外面はナデ調整の上に口唇部直下に貝殻腹縁の連続押圧文を2条巡らせ、下部には、貝殻による綾杉状の文様を施文する。内面は横位のヘラナデ調整である。13は円筒形の直行する口縁部である。外面口唇部直下には、ナデ調整の上に貝殻腹縁の連続押圧文を横位に4条巡らせ、その下部には、斜位の貝殻条痕文を施文した後、縦位に貝殻腹縁の連続押圧文を間隔をあけて施文する。内面は、口唇部直下2cm程度が横位のヘラ削り調整で、その下部は縦位のヘラ削り調整である。色調は、灰褐色1・2・3・4・5・6・7・8・12・13、浅橙色10・11、灰橙色7である。胎土には、長石が目立つもの3・4・5・6、石英が目立つもの10・13、雲母を含むもの10・11がある。焼成は全て普通である。14・15・16は口縁部が緩やかに外反する円筒形平底の器形を呈する。地文は横位の貝殻条痕文であり、クサビ形貼付け文を1段有する。14は外面の口唇部直下に貝殻腹縁の連続押圧文を2条巡らす。15・16は貝殻腹縁による斜位の刺突文を同部位に巡らす。口唇部の刻目は、12が外周に対して斜位、15・

第14図　札ノ元遺跡出土土器実測図 (1)（縮尺１／３）

16 が直行して施文される。内面は、3点とも口唇部3～5cm程度は横位のヘラナデ調整であり、胴部以下は斜位または縦位のヘラ削り調整である。17・18・19はクサビ形貼付け文を2段有し、口縁部は外反する。17 は外面の口唇部直下に縦位の沈線を巡らせ、更にその下に貝殻腹縁の連続押圧文を1条巡らす。また、クサビ形貼付け文間には、貝殻腹縁を斜めに連続押圧する文様を縦位に1条施文する。内面は、口縁部は横位のヘラナデ調整であり、18は、外面の口唇部直下に貝殻腹縁の連続押圧文を2条巡らせる。内面は、口縁部が横位のヘラナデ調整であり、下位は斜位のヘラナデ調整である。19は外面の口唇部直下に18と同様の押圧文を3条巡らせ、クサビ形貼付け文間には17 と同様の押圧文を縦位に1条施文する。内面は、口縁部が横位のヘラナデ調整で下位は斜位のヘラ削り調整である。20・21は口縁部が外反し、3段のクサビ形貼付け文を有する。20・21とも外面口唇部直下に貝殻腹縁の連続押圧文を2条巡らせ、最上部のクサビ間にも横位に1条巡らせている。また、クサビ形貼付け文間には、20が貝殻腹縁の連続押圧文を縦位に2条、21が同様の押圧文を「〳〵」形に施文する。20の外面は、ナデ調整のみで貝殻条痕文はないか、21の地文は斜位の貝殻条痕文である。20 の内面は、口唇部直下1cm程度はヘラナデ調整であるが、それより下位は、斜位の荒いヘラ削り調整である。また、21 の内面は全面横位のヘラナデ調整である。22・23・24・25は角筒平底の器形を呈し、波状の口縁部を有する土器である。22は相対する2面のみクサビ形貼付け文を持つものと思われるが、2段か3段か不明である。外面の角部には貝殻腹縁による刻目が施される。口縁部の外面には、湾曲に沿って3条の貝殻腹縁の連続押圧文が施文され、胴部には間隔を持って同様の押圧文が縦位に1条施文される。更に、縦位の連続押圧文の間には3条の同様の押圧文が、途中で括れる「〳〵」形に縦位に施文される。内面は、横位と斜位のヘラ削り調整であるが、隅部は棒状施文具によるナデ調整である。また、外面はナデ調整であり、貝殻条痕文は施文しない。23は外面に斜位の貝殻条痕文を施し、口唇部直下のみナデ消して貝殻腹縁の連続押圧文を3条巡らす。クサビ形貼付け文はなだらかであり、両側から刻目を施す。縦位の押圧文の構成は不明である。内面は、縦位と横位のヘラ削り調整である。24の外面はナデ調整であるが、部分的に貝殻条痕文の痕跡が観察される。22と同様に相対する2面のみに3段のクサビ形貼付け文を有するものと思われる。また貼付け文を有しない面の文様の構成は22とほぼ同一である。また外面角部の刻目はヘラ状施文具による。しかし、24の文様を構成する長方形の連続押圧文は、貝を利用するものか どうか不明である。25は角筒底部である。斜位の貝殻条痕文に重ねて貝殻腹縁による連続押圧文を菱形状に施文すると思われる。底部直上は、ヘラ状施文具による沈線が巡る。底部外面はヘラ削り調整であり、上げ底状を呈する。内面は壁面が縦位のヘラ削り調整であるが、底部は凹凸があり荒い仕上げである。色調は、全て茶褐色を呈する。また胎土は、長石が目立つもの15・17・18・19、石英が目立つもの22・23である。焼成は、21が良好であり、他は普通である。第16図は、口縁部にヘラ、貝等による文様帯を持った土器群である。26は 口唇部から口縁部外面にか

第15図　札ノ元遺跡出土土器実測図 (2) (縮尺 1 ／ 3)

けてヘラ状施文具により羽状の沈線文を施す。その下位には約3㎝幅で貝殻条痕文を横位に巡らせ、斜位の貝殻条痕文が胴部以下に続く。内面は、貝殻条痕による荒い器面調整が施されるが、その上をヘラでナデ消した部位も観察される。内面の口唇部直下には、幅約1㎝の横位のヘラナデ調整が巡る。27は26と同様の部位に貝殻腹縁による羽状の文様を施す。そして横位に約1㎝幅の貝殻条痕文が巡り、以下は斜位に施文する。内面の口唇部直下は、約1㎝幅のヘラナデ調整が巡り、以下は下から上へ斜位の削り調整が施されている。28は口縁部外面に2と同様の羽状の沈線文を施す。その下部は、横位の貝殻条痕文が数条巡り、斜位の貝殻条痕文が続く。内面は、口唇部直下はナデ調整で、その下位は下から上へのヘラ削り調整である。29は口縁部外面に棒状施文具による縦位と斜位の凹線文を施す。下部は、約4㎝横位に貝殻条痕文を施し、斜位の貝殻条痕文が続く。口唇部はナデ調整であるが、内面の調整は風化の為不明である。30は口縁部外面に貝殻腹縁による押し引き状の文様を巡らせる。貝殻条痕文は、上部は横位であるが、下部は斜位である。内面の調整は、口縁部は指ナデ調整であり、指頭圧による凹凸があるが、下部は下から上へのヘラ削り調整である。31は外面の口唇部直下に貝殻腹縁端部による沈線を施す。下部はほぼ全面斜位の貝殻条痕文である。内面は、口唇部下4㎝程度は貝殻条痕文とは異なる荒い条痕文を施し、下部は下から上へのヘラ削り調整である。32は外面の口唇部直下にヘラ状施文具によって左から右へ押し引き文を施し、その直下に貝殻腹縁端部による押し引き文を同方向に巡らす。口唇部は、ヘラ状施文具によって口縁部外面と逆方向に押し引き文を施文する。外面口縁部下は横位の貝殻条痕文である。内面の調整は、下部から口縁部へヘラ削り調整を施した後、口唇部下5㎝程度は浅い条痕文を施す。33は口縁部外面に棒状施文具による押し引き状の刺突文を左から右へ2段巡らせる。下位は斜位の貝殻条痕文である。内面は丁寧なヘラナデ調整である。34は外面の口唇部下2㎝程度は横位に貝殻条痕文を巡らせ、重ねてヘラ状施文具により左下から右上にハネるように沈線文を施す。直下には、貝殻腹縁による連続刺突文が1条巡る。その下部は斜位の条痕文である。内面及び口唇部はヘラによる研磨状の丁寧な調整を施す。35は外面の口唇部直下2㎝程度に貝殻条痕文を横位に巡らせ、重ねてヘラ状施文具による沈線文を縦位に施す。下部はナデ調整の上に部分的に貝殻条痕文を施文する。口唇部及び内面は指ナデ調整である。36は外面全体に貝殻条痕文とは異なる浅い条痕文を施し、口縁部に棒状施文具による浅い斜位の沈線を巡らす。内面は、指頭による凹凸を残して外面と同様の非常に浅い条痕文を横位に施す。37は角筒口縁部であるが、文様構成及び施文方法は32に類似する。外面の口唇部直下にヘラ状施文具による押し引き状の沈線を右から左へ巡らせ、その下位は逆方向に貝殻腹縁端部の刺突文を施文する。口唇部には沈線文と同方向に、ヘラ状施文具による浅い押し引き状の刻目を巡らせる。内面は、横位のヘラナデ調整である。38は、円筒土器底部である。外面は、底部の外面に相当する部位は横位に貝殻条痕文を施文し、その上部は斜位に施文する。内面は、底部上面、壁面ともにヘラ削り調整を施す。色調は、黒褐色30、茶褐色26・27・28・31・32・35・37、浅橙



第16図　札ノ元遺跡出土土器実測図 (3)（縮尺１／３）

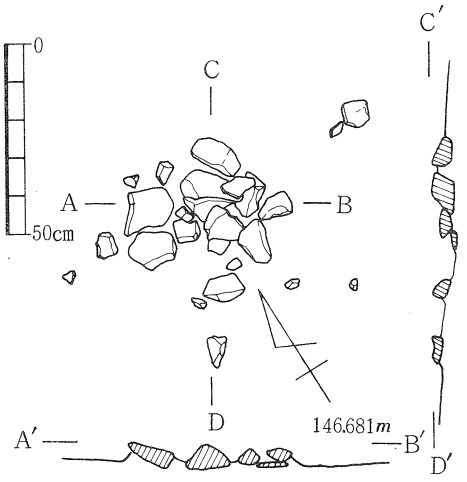
色33・34・35、赤褐色27である。全ての土器の胎土には石英・長石が含まれるが、雲母が目立つのは34のみである。調整及び焼成は33・34が丁寧かつ良好であり、他は普通である。

石器は、石鏃・磨石・局部磨製石斧・スクレイパー・石匙・尖頭状石器・磨製異形石器・円盤状石器・礫器・石皿等が出土している。

石鏃は約60点出土しており、平基鏃と円基鏃が数点の他は全て凹基鏃である。凹基鏃は、芳ケ迫第3遺跡と同様、抉りの形状によって3種類に大別される。全体の形態としては、正三角形状で側辺がゆるやかに張り出すものが多く、スリムな二等辺三角形状のものは僅かである。石材としては、黒曜石製が29点（姫島産9点を含む）と半数を占め、チャート製22点、サヌカイト製10点と多く、その他細粒砂岩、石英脈岩、メノウ等が素材として使用されている。磨石は約150点出土しており、剝片等も多い。石材は、砂岩が最も多く、その他安山岩・粘板岩・頁岩・流紋岩等が利用されている。局部磨製石斧は9点出土しており、玄武岩製2点の他は砂岩製である。側辺を荒い剝離で形を整え、両面の大部分を研磨するものが多いが、厚めの剝片を利用し、表面のほぼ全面を研磨するのに対して裏面は刃部のみ研磨するものもある。尖頭状石器は4点出土しており、全てサヌカイト製である。粗い加工で全体を三角形状に整えており、断面はレンズ状を呈する。磨製異形石器は、全面磨製のものと局部磨製のものがある。粘板岩・細粒砂岩製の厚さ5㎜前後の剝片を利用しており、表裏面とも全面研磨して石庖丁様の形状を呈するものや、裏面は刃部のみを研磨するもの等がある。その他の石器の出土数は1点から数点である。

旧石器時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構の調査を終了した後、トレンチを第Ⅸ層（第2オレンジ層）上面まで掘り下げたが、旧石器時代の遺物は出土しなかった。そこで、調査期間等を考慮してA－4・5・6区を全面調査することにして掘り下げたところ、A－5・6区の第Ⅶ層中より剝片が出土し、更にA－6区東隅で第Ⅶ層下部より石核等を伴って集石遺構1基が検出された。集石遺構は、砂岩製の礫を使用し、掘り込みは見られない。出土遺物は、流紋岩製の石核1点、剝片数10点及び凝灰質泥岩製の石核2点、剝片を利用したスクレイパー2点、剝片約100点であり、これらが混在してA－6区からA－7区にかけて径3m程度の範囲で出土した。



第17図　集石遺構実測図

Ⅲ　まとめ

今回の前平地区遺跡群の調査において、芳ケ迫第２遺跡では、当初の目的であった箱式石棺の検出はできなかったが、中世の陶磁器類を主とする遺物が出土した。また、芳ケ迫第３遺跡及び札ノ元遺跡では、旧石器時代・縄文時代早期を主とする遺物が出土し、それに伴う遺構が検出された。

旧石器時代の調査については、芳ケ迫第３遺跡及び札ノ元遺跡において、旧石器時代の遺物包含層が層位的に把握され、２基の集石遺構が検出された。集石遺構は、１０数個の礫によって構成される小規模のものであり、礫自体は熱を受けた痕跡は見られない。また、集石遺構を中心に１ユニットとして把握される出土石器群は、同一母岩の石核・剝片などであるか、２つのユニット間には剝離技術の差異が観察される。石器群を伴った旧石器時代の集石遺構は、先に芳ケ迫第１遺跡で検出されており[1]、宮崎学園都市遺跡群内の堂地西遺跡においても良好な資料が検出されているが[2]、それらに続くハードローム層中における旧石器時代研究の貴重な資料になると思われる。

縄文時代早期の遺構としては、集石遺構・土坑・住居址が検出されている。

縄文時代早期の集石遺構に関しては、芳ケ迫第３遺跡・札ノ元遺跡ともにアカホヤ層を除去した面で小礫の散在が一面に見られた。礫自体は、遺跡周辺に普通に見られる自然礫であるか、熱を受け赤変したものや破砕礫等が混在していた。調査開始当初は、全てが人為的なものかどうかの判断が困難であったが、明らかに礫の密集度の高い部分があり、掘り込みを有する集石遺構を数基含むことがボーリング等によって判明したため、人為的な行為の加えられた遺構と判断し、焼石群として記録した。その他の集石遺構は、掘り込みの有無にかかわらず掘り下げていく段階で単独で検出されており、構成する礫はほとんどが熱を受けたものや破砕礫であった。集石の埋土中には炭化物は検出されるものの焼土は検出されず、他に焼土を有する土坑が存在することから、同時期のものとすれば同時生活面での何らかの機能的な差異が存在するのではないかと思われる。集石遺構の形態は多様であり、その分類と分布状況及び焼石群の成因等については、今後検討したい。

縄文時代早期の土坑も、集石遺構と同様に形態は様々である。その中で、宮崎県内で初めて確認された連穴土坑とともに[3]、長円形又はスプーン状の形状を呈し、凹部を有する土坑が注目される。埋土中及び床面には土器等の遺物に伴って円礫や角礫等が検出されたか、大型の礫は凹部の直上に検出されたものがほとんどである。このタイプの土坑が数基連続するものも存在するが、発掘区内の緩やかな傾斜面に検出されるのが特徴である。また連穴土坑と切合っているものもあり、分布状況や成因とともに、連穴土坑やその他の土坑及び集石遺構との関係等が今後の課題で

ある。

縄文時代早期の住居址は、札ノ元遺跡において3基検出されたが、柱穴と思われるピットを有し、プラン等が明確なものは2基である。遺物は、埋土及びピット中より貝殻文（吉田・前平系）土器が出土しているが、床面直上では出土していない。縄文時代早期の住居址としては、鹿児島県の加栗山遺跡で検出例があり[4]、前平遺跡群内においても昭和58年度に調査された又五郎遺跡で確認されている。いずれも札ノ元遺跡のものと同様に、隅丸方形又は隅丸長方形プランであることなどから、発掘区内における他の遺構との関連と同時に、他の遺跡との比較検討も今後の課題である。

縄文時代早期の土器に関しては、現在整理中であるが、芳ケ迫第3遺跡と札ノ元遺跡では土器の組成が明らかに異なっており、芳ケ迫第1遺跡とも異なるものである。芳ケ迫第3遺跡は押型文土器が主体であり、その他は型式未設定の土器等が出土している。貝殻を利用した施文も見られるが、いわゆる貝殻文（吉田・前平系）土器は出土していない。一方、札ノ元遺跡は、押型文土器・手向山式土器・平栫式土器・貝殻文（吉田・前平系）土器・型式未設定の土器等が出土しているが、主体は貝殻文（吉田・前平系）土器であり、遺構に伴う土器のほとんどを占めている。現段階で2つの遺跡を比較すれば、芳ケ迫第3遺跡においては押型文土器が主体であり、さらに貝殻文（吉田・前平系）土器より古い様相を持つ可能性がある土器も出土していることなどから、両遺跡の土器群における組成の相違を時期差に求めるとすれば[5]、芳ケ迫第3遺跡の土器群が札ノ元遺跡の土器群に先行する様相を呈していると考えられる。また、貝殻文（吉田・前平系）土器について札ノ元遺跡と芳ケ迫第1遺跡を比較すると、札ノ元遺跡においてクサビ形貼付け文を有するタイプのものが多量に出土しているのに対し、芳ケ迫第1遺跡ではほとんど出土していない。さらに、地文に貝殻による押し引き文を施文するタイプのものは、両遺跡ともにほとんど出土していない。その他、塞ノ神式土器については、芳ケ迫第1遺跡、芳ケ迫第3遺跡、札ノ元遺跡ともに出土は見られないが、又五郎遺跡では出土土器の主体を占め、貝殻文（吉田・前平系）土器・押型文土器等が共伴している。以上のように、前平地区遺跡群内では遺跡によって土器群の組成が異なっており、仮に組成の相違が時期差に求められるとすれば、1つの方法論として、南九州の縄文時代早期の土器編年における貴重な資料になると思われる。

縄文時代早期の石器について、石鏃に使用される石材に関しては、芳ケ迫第3遺跡・札ノ元遺跡ともに姫島産の黒曜石が使用されているが、札ノ元遺跡出土における黒曜石中に占める割合いのほうが高く、サヌカイトの割合いも同様である。その他、サヌカイト製の尖頭状石器も札ノ元遺跡で出土している。また、両遺跡でそれぞれ特徴的な石器が出土しており、土器等との関連を含めて検討していきたい。

その他、芳ケ迫第3遺跡で検出された縄文時代晩期の遺構・遺物及び芳ケ迫第2遺跡の中世の

遺物については、本報告において詳細な検討を加えたい。

註(1) 面高哲郎「芳ケ迫第１遺跡－県営農地開発事業前平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概報－」田野町文化財調査報告書第１集　1984。

註(2) 「堂地西遺跡」『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報（Ⅳ）』宮崎県教育委員会 1983。

註(3) 「加栗山遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（13）』鹿児島県教育委員会 1981。

註(4) 註３に同じ

註(5) 註２に同じ　口縁部に爪またはヘラ状工具による施文がなされる土器が出土している。

図　　版

芳ケ迫第 3 遺跡
2 号焼石群

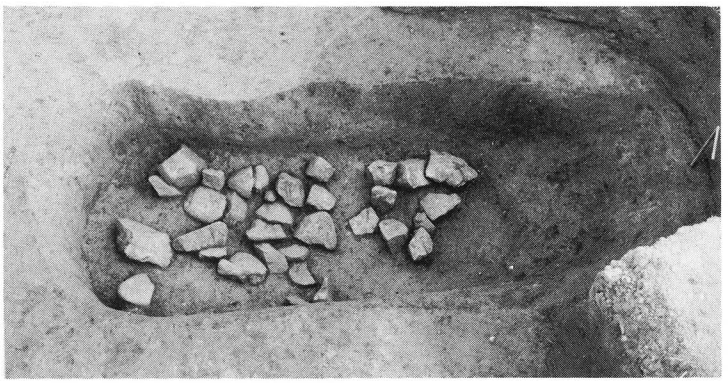
芳ケ迫第 3 遺跡
1 号集石（断面）

札ノ元遺跡
8 4 号集石（断面）

芳ケ迫第 3 遺跡・札ノ元遺跡縄文時代早期の集石遺構

図版 2

７２号土坑



99◦100号土坑
（切合い状況）

１０２号土坑

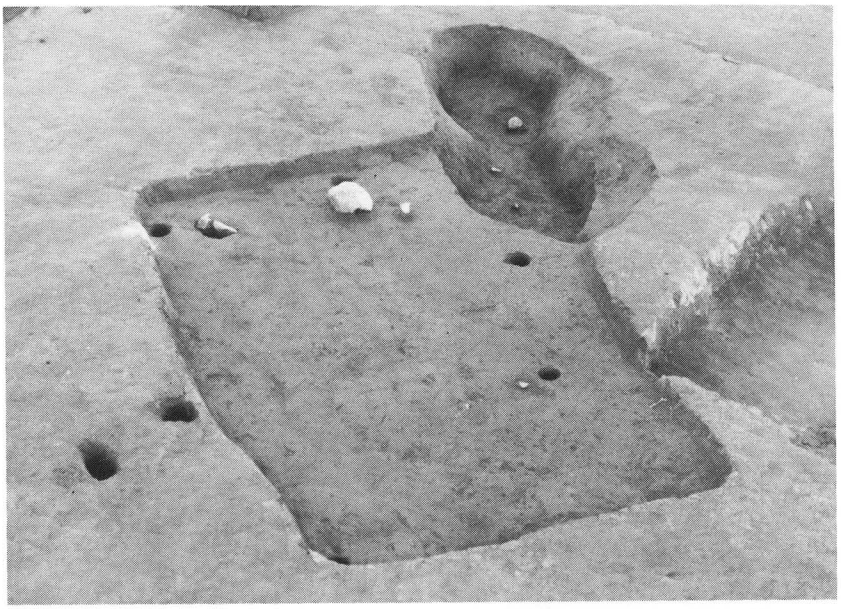
札ノ元遺跡縄文時代早期の土坑　(1)

75・76・109号土坑

77・78・110号土坑

札ノ元遺跡縄文時代早期の土坑　(2)

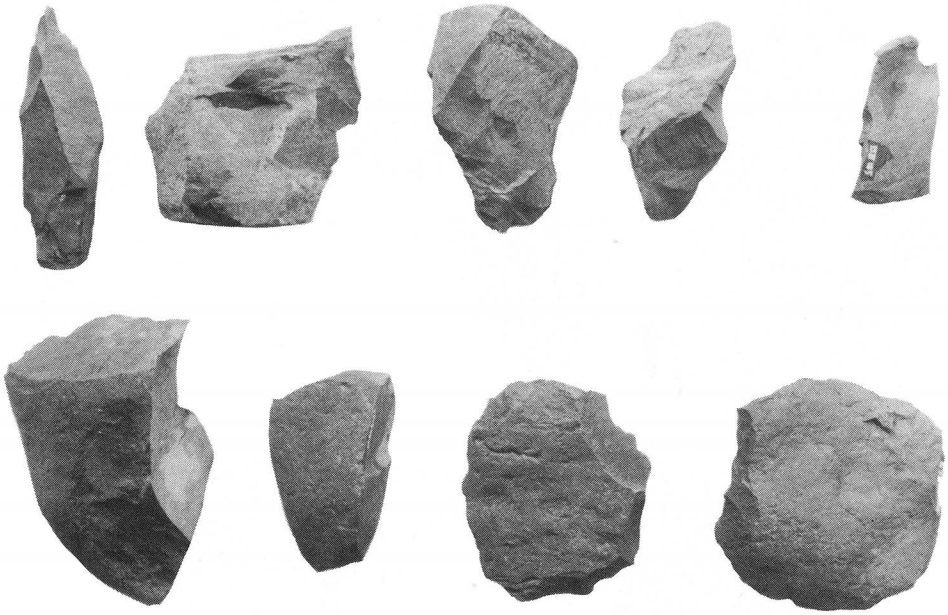
図版 4



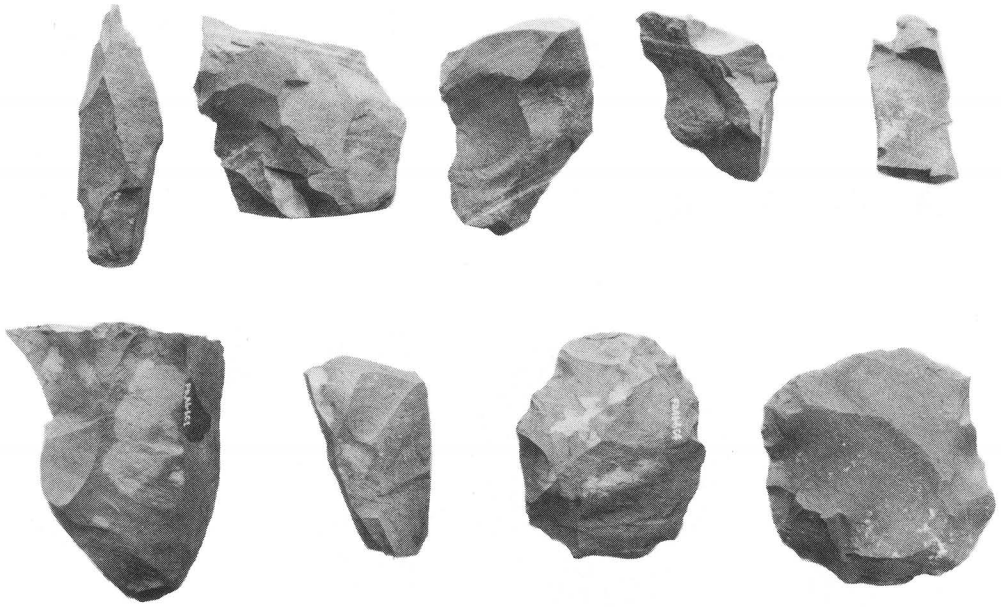
2 号 住 居 址

3 号 住 居 址

札ノ元遺跡縄文時代早期の住居址



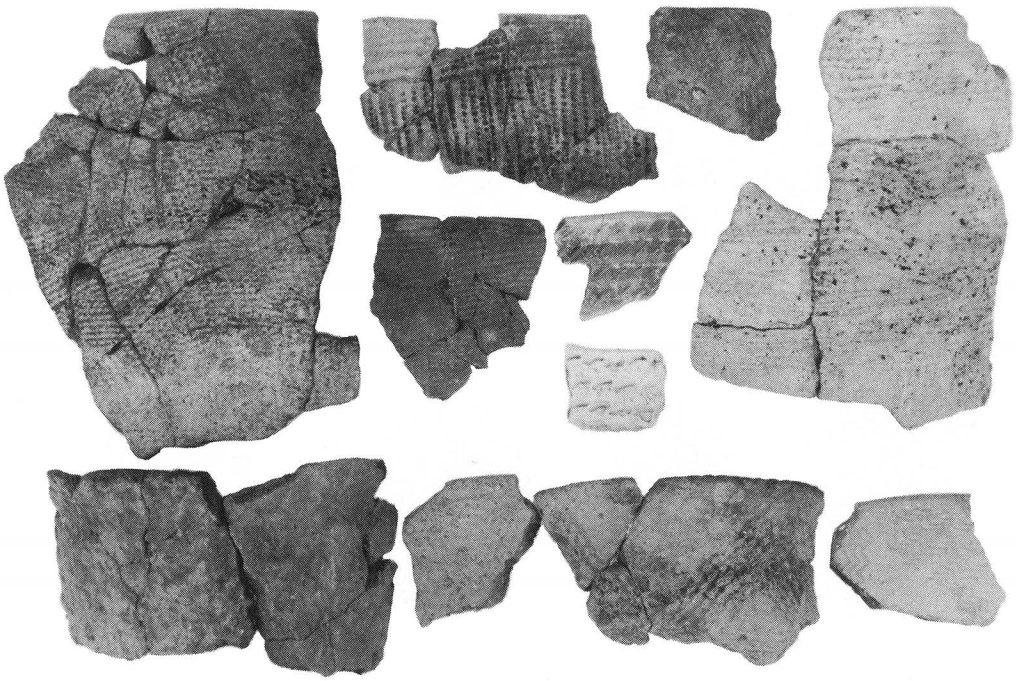
芳ケ迫第 3 遺跡（上段）　札ノ元遺跡（下段）



芳ケ迫第 3 遺跡（上段）　札ノ元遺跡（下段）

旧　　石　　器

図版 6



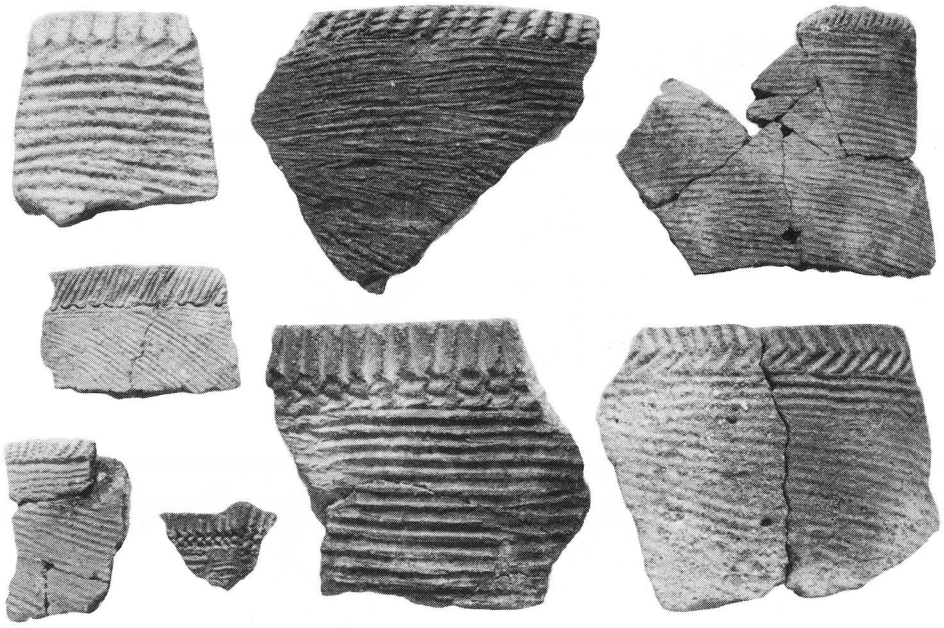
芳ケ迫第 3 遺跡出土　縄文時代早期土器

芳ケ迫第 3 遺跡出土　縄文時代早期石器

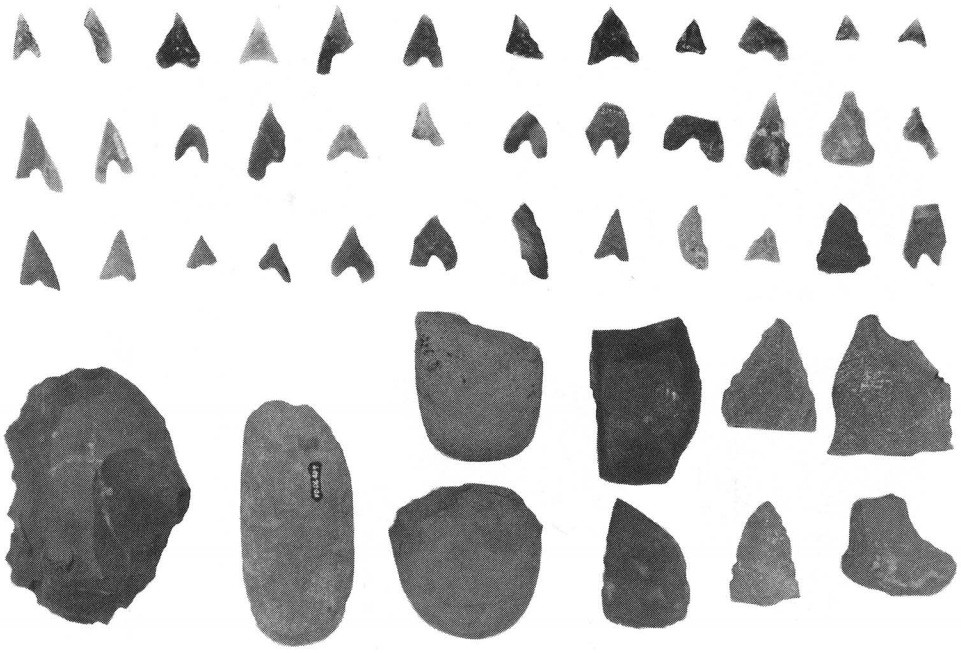
札ノ元遺跡出土　縄文時代早期土器(1)

札ノ元遺跡出土　縄文時代早期土器(2)

図版 8



札ノ元遺跡出土　縄文時代早期土器(3)



札ノ元遺跡出土　縄文時代早期石器

田野町文化財調査報告書第２集

芳ケ迫　第２遺跡

芳ケ迫　第３遺跡

札ノ元　　遺跡

県営農地開発事業前平地区に
伴う埋蔵文化財発掘調査概報

発行年月日　昭和60年３月31日
発　　行　田野町教育委員会
印 刷 所　㈲昭和印刷